"ミュンヘン"への道

"ミュンヘン"。全世界のハンドボール関係者が憧れをこめて呼ぶ地名である。

その地に聖火が燃え、ハンドボールが行われるまであと3年余だ。

長くも、短くもなる月日であり、その道のりも同じことがいえるだろう

編集部では、新年度を機にこの欄を設け、読者諸賢とともにミュンヘンへのけわしく長い道のりを歩んで行こうと思う。積極的な寄稿を期待したい。

× × ×

トップレベルの充実については日本協会でも昨年から選手強化対策本部を設け、すでにいくつかの実績を残しているが、現在発表され訓練をうけている選手のほとんどは来春の"世界選手権要員"であろう。

このこと自体に異論はないが少くとも"オリンピック要員"の調査・発掘対策だけは早急にねりあげられるべきではないか

過去3回（男子）の世界選手権遠征で日本チームの敗因として必ず反省されたのは"経験不足"である。

地理的条件などいくつかの原因が考えられるが、計画性のない選手決定もその一つにあげられる。

周到な準備を経て候補選手群を編成し、さらに時日を重ねて国際経験を与えるようにしなければいつまでたっても日本チームからこの反省をなくすことは出来ないであろう。

多少の入れ替えを行うとしてもミュンヘンをめざす選手たちを、来夏にはリストアップしておくことが望ましい。

そのためには、本年度からあらゆる機会に"要員スカウト"を心がけ、そのシステムを確立すべきだと思う。

本誌前号によれば、全日本チームは欧州遠征から帰国後、全国各地に強化を兼ねて巡回するというが、その対戦相手として20才前後で固めた「全日本ジュニア」や「各地区ジュニア」を選ぶことを提案する。

勝負はれき然とし、試合的興味もうすらぐが、それによる将来の副産物の大きさは計り知れぬだろう。

「各地区ジュニア」の精鋭が「全日本ジュニア」となり、現在の「全日本」と合流して、来夏にはオリンピック用の「新しい全日本」を生むのだ。その時点からミュンヘンまでは2年を残すだけなのである。（杉山）

時評

日本協会では役員改選を機に、その体制をガラリと変動させ新シーズンのスタートを切ることになった。

2年前にかなり思い切ったシステムを確立したわけだが、それももはや現在の日本協会には物足りぬ"内容"になってしまった、というわけだろう。

今回の改革でもっとも注目をあびるのは"トップレベルの強化"へ一丸となって進む姿勢を強く示している点だ。

3年後のミュンヘンオリンピック、来春にせまった世界選手権（男子）は日本ハンドボール界の浮沈をかけた"非常時態"である。

この機に、日本協会がそのすべてを両大会へかけ突進しょうとするのは当然といえよう。

なかでも選手強化対策委員会（新名称）の活動は、悲願成就のカギを握るものである。

強体本部は昨年10月与望をになって発足したのだが、初年度ということもあって必しもその動きは軌道に乗っているとはいえない。

特に、日本協会との協調は不備で、再三"行きちがい"が演じられている。

日本協会が産婆役でありながらせっかく生まれた強対本部の存在をよく判っていないからだなどとも云われていたが、そのような怠慢はもう許されない。

日本協会は強対委の自主性を認め、トップレベル強化に関しては同委員会に全幅の信頼をおくべきなのである。

強対委も、自らにかけられている期待と責任の重大さを改めて知って欲しい。これは全日本候補に選ばれた選手諸君にもあてはまる。

協調といえば、本誌（前号）が報じるところによると、技術部、普及部それに全日本教職員連盟がいずれも今年度の事業・活動予定として「中学校学習指導要領」の指導課程作成と研究をあげている。

今のうちに調整をしておかないと後日混乱を招くことになりはしないだろうか。

これらの問題に限らず各パート間の連絡・パイプ役を日本協会は積極的につとめて欲しい。

卒直にいうとこうした能力に日本ハンドボール界は欠けている。

田村新会長の構想といわれる新体制の成功を期待するわけだが、あえて筆者はこれを「最後の期待」と呼びたい。（S）

「ハンドボール」4月号（第63号）目次

表紙写真
3月22日から東京で行われた全日本男子第2次強化合宿

合議制（会長・副会長・常務理事）で協会を運営

理事長制をしばらく休止

強化委員長に村田氏

新理事（昭和44・45年度）による初の全国理事会は3月16日午後10時から東京渋谷の体協五〇一会議室で開かれた。

2月の全国理事会で保留されていた荒川理事長の任期満了にともなう新理事長選出については会議冒頭から活発な論議が展開されたが、世界への雄飛という大課題を成就するために新しいシステムの採用という意見が強く押し出され、これまでの「理事長制」を当分の間廃止し、新たに「会長・副会長・常務理事による合議制」で協会運営を担当するという注目すべき決定をみた。

この結果、42年度から2年間（任期）にわたり理事長をつとめていた荒川清美氏は退任、今後は理事（会長推せん）として協会運営にタッチする。合議スタッフは14名である。

このほか田村会長から協会新機構案が提出され承認、選手強化対策委員会委員長に村田弘氏（全日本男子ナショナルチーム監督）が推せんされた。

また新役員による分掌、昭和44年度予算、同国内事業、同国際事業などが承認され午後3時すぎ散会した。

審判部長に安藤氏留任

技術は若崎氏　国際河内、総務岡村氏

会議は、勤務上などの都合で欠席の7氏（栗脇、森田、平仲、久保、安藤、岡村、藤本）を除く田村会長、西、保坂、渡辺各副会長と21理事（北海道は石切山氏）が出席して開かれた。

議事に入る前、田村会長が「日本協会の役員は、狭量な意見を持つことなく自信・協力・集中・調節の四原則を守り、来るべき世界選手権、ミュンヘンオリンピックに向かって一致団結した行動をとって欲しい」と新任の挨拶をかねて要望、つづいてブロック選出理事、加盟団体選出理事、会長推せん理事の順で新理事の紹介が行われた。

会長推せん理事は、田村体制の推進力の一つともみられるだけにその人選が注目されていたが、かっての日本協会役員のカムバックが目立ち、前年度常務理事陣と大きく入れ替わった。

2月の全国理事会（旧構成）で持ちこしとなっていた理事長選出については、荒川清美氏の重任を推す声も出たが、球界の当面する課題の解決と前進には、一人の力よりも複数の力で乗り切るべきだという結論へ達し、前文のような合議制を採ることに決まった。

日本協会史上、任期途中で理事長が退任した場合を除き、このように年度初頭から合議制を決めたのは初めてのことである。

なお、合議制はあくまで暫定措置であり、その期間については会長の判断にまかせることとなった。諸般の情勢から少くとも来春の男子世界選手権（45年3月・フランス）まではこの態勢が続けられるものと想われる。

3局制を全面的に廃止

このあと、田村会長から協会機構の改革案が出された。これまでの3局10部制を全面的になくし、新たに3部（選手強化・財務・機関誌）と4委員会（総務・技術・審判・国際）制にする提案が示された。3部のうち選手強化部門の独立は賛同を得たが、あとの2部は、委員会の中に加えるべきだという意見が支配的で、結局次頁のような構成となった。

選手選考（全日本優秀チーム、同選手＝ベスト・セブン、ナショナルチーム）を理事会（常務理事会）と強対委の合同で行うことになったのも新しい考えかたで、また、これまで審判部が担当していた用具関係の業務も理事会に移行された。

なお、体協派遣役員については2月の全国評議員会で推せんされた体協評議員＝田村正衛（会長）JOC（日本オリンピック）委員＝渡辺和美（副会長）競技力向上委

日本協会昭和44～45年度新役員

（○印常務理事）

▼会　長　田村正衛

▼副会長　保坂周助　西敏郎　渡辺和美

▼ブロック選出理事（各1名）

▽北海道　（未定）
▽東　北　佐藤　　敦（岩手）
▽関　東　入江　暢一（茨城）
▽東　海　栗脇　　嶷（愛知）
▽北信越　油井孝一郎（長野）
▽近　畿　森田　正英（奈良）
▽中　国　藤田　信義（山口）
▽四　国　越智　　武（愛媛）
▽九　州　藤田　八郎（熊本）
▽沖　縄　平仲　孝栄

▼加盟団体選出理事（各2名）

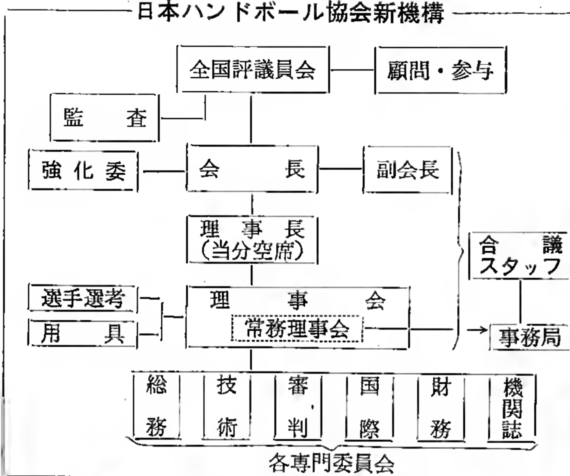
▽全日本学連　田中　秀夫
　　　　　　　久保　義雄
▽全国高体連　嶋田新太郎
　　　　　　　清水　　正
▽全日本実連　田中　滋章
　　　　　　　平出　　一
▽全日本教職連　山田　　計
　　　　　　　町田　歳雄

▼会長推せん理事（11名）

荒川　清美　○若崎　重富
○安藤　純光　○岡村　昭二
○藤本　　強　○宮崎　慎六
○佐久間義雄　○飯田　　明
○渡辺　一己　○河内　鋭雄
○森岡　毅雄

員＝西敏郎（副会長）の三氏が承認され、国体委員には若崎重富氏が決まった。若崎国体委員は、合議制が廃され理事長制が復活された場合には新理事長と交替する。

新設のＩＨＦ（国際ハンドボール連盟）担当役員は渡辺和美氏がＪＯＣ委員と兼任することになった。



財務部長に森岡氏新任

つづいて、常務理事の選出に議事は進められ、新機構にともなう6部門の部長を決定し、その6氏をまず常務理事とすることになり次の各氏が推せんされた。

総務部長＝岡村昭二（東京教大出）、技術部長＝若崎重富（日体大出）、審判部長＝安藤純光（法政大出）、国際部長＝河内鋭雄（東大出）、会計（財務）部長＝森岡毅雄（早大出）、機関誌部長（編集長）＝藤本強（東大出）。

さらに会長推せん（補充）として宮崎慎六（早大出）、佐久間義雄（明治大出）、飯田明（立教大出）、渡辺一己（関学大出）の4氏が加えられることになり、この10名の常務理事と会長・副会長（3名）の計14名が「合議制」のスタッフと決まったわけである。

会長補充のリストに対しては、加盟団体系列、ブロック系列からも人選すべきだという意見が出て会長が改めて追加・補充を検討することになった。

女子の強化対策も検討

選手強化対策委員会（強対本部）については、原則として現行の体制（男子及び女子指導委員会と医事委員会）を引きつづき活用することとし委員長には村田弘氏（日体大出）の起用を決定した。

村田氏はこれまで男子指導委員で、すでに来春の第7回世界男子7人制選手権全日本代表チーム監督に就いている。競技力向上委員の西副会長が、同委員会の〝相談役〟的な立ち場をつとめることも申し合わされた。

女子のスタッフ拡充については今後の国際情勢をみて進める。

なお、5月に欧州遠征するコーチ団（村田監督、勝、竹野両コーチ）は来春の世界選手権のコーチ団もつとめることに正式決定した

全日本男子第2次候補の国内試合出場を規制

日本協会全国理事会は、3月16日の会議で、さきに発表された「全日本男子第2次候補選手」（17名＝本誌前号既報）を、今シーズン（44年4月～45年3月）中、いかなる国内試合にも所属（母体）チームから出場させないことを決め、所属チーム関係者、当人へ通達することになった。

この決定は、1月末の旧常務理事会で決議されていたが、選手強化対策本部男子指導委員会では、逆に、強化合宿、遠征以外の期間は所属チームにそれぞれ復帰させて活動することを認めるという決定をしており、日本協会と同本部で食いちがった見解を示していた。

今回の全国理事会で協会案が確認され正式決定したわけだが、全日本学連では3月8日の全国役員会で協会案に反対の態度を決め、全国理事会でも、田中秀夫学連選出理事から強硬な反対意見が出されていた。

なお、日本協会では欧州へ遠征する第2次候補にもれた残りの選手の処遇は選手強化対策委員会に一任することを決めたが、シーズン中これら選手と第2次候補との入れ替えは当然あり得るといっている。

全国従断試合、具体化へ

選手強化対策委員会は、全日本男子の強化策の一環として、欧州遠征から帰国後、全国従断試合を計画しているが、早急にその日程を検討し、地方協会、各加盟団体の協力をあおぐことになった。

国際審判講習会に 山田計氏を派遣

日本協会は今年度の国際事業を次のように決め発表した。

ＩＨＦ主催による国際審判員講習会には山田計氏（日体大出・全日本教職員連盟理事長）を派遣する。

日本からこの講習会に参加するのは花畑平男（自費渡欧）、若崎重富、藤本強の各氏についで4人目。

なお、韓国高校男子の来日は昭和38年12月についで2回目、大学男子の韓国遠征は昭和36年10月の日体大についで2回目。（遠征チームに関しては本誌4頁参照）

全日本男子の欧州遠征に関しては本誌8頁参照

○……○……○

▽全日本男子欧州遠征　5月15日～6月下旬、ルーマニアで強化合宿。

6月27日～7月2日　タスマジヤンカップ国際トーナメントへ出場（ベオグラード）

（注）ルーマニア行の途次　台湾でエキジビション試合を計画中。

▽ＩＨＦ国際審判員講習会　7月7日～13日（マドリッド）

▽学生男子韓国遠征　6月又は7月（京城ほか）

▽韓国高校男子来日　6月18日第20回全日本高校選手権東京都代表19日　同優勝校がそれぞれ対戦。

▽第7回世界男子7人制選手権出場　45年2月26日～3月8日（フランス）

昭和44年度登録要領を発表

日本協会は昭和44年度（44年4月1日～45年3月31日）のチーム登録要領を決め発表した。

すべての経費は前年度額そのままにすえおかれた。

チーム登録（一般は個人登録も）は所定の用紙に必要事項を記入し登録料などを添えて各都道府県協会あて提出しなければならない。

各都道府県協会はそれらをまとめて昭和44年5月31日までに協会長承認印を捺し、日本ハンドボール協会（東京都渋谷区神南町25、郵便番号一五〇）に届けねばならない。登録〆切日をすぎたあとの受けつけはいっさい行われないが、新設チームはこの限りではない。また一般の個人追加登録は6月1日以降も認められるが一人につき五〇〇円の追加料の納入が要る。

44年度登録金(円)

	基本金	オリンピック基金	機関誌(年十一回分)	その他	計
一般	一、〇〇〇	一〇〇	一、二〇〇	人員×一〇〇	二、三〇〇プラス(人員×一〇〇)
大学	一、〇〇〇	一〇〇	一、二〇〇	なし	二、三〇〇
高校	六〇〇	一〇〇	一、二〇〇	なし	一、九〇〇

韓国遠征をかけて大会……全日本学連

全日本学生連盟では3月8日の全国役員会席上、韓国協会から提案された「日韓大学交流」の再開をうけいれることを決め、今年度遠征チームについて協議した。

その結果、韓国側が単一校の来征を要望しているため、その線にそって選考を行うこととし、各学連から一校を推せん、5月下旬または6月上旬に「韓国遠征校決定大会」を開く。会場、試合方法などは未定。代表校は6月中に訪韓する。なお、関東学連では春季リーグ一部優勝校をこの大会に出場させると表明。

また同席上、会長に西敏郎氏(関東学連会長、慶大出)、理事長に安藤純光氏（法大出）をそれぞれ再選、委員長に奥川正春君（関東学連委員長、早大4年）を新任した。日本協会派遣役員は新たに田中秀夫氏（関東学連理事長、中大出）を推せん、久保義雄氏（関西学連理事長、同大出）は再選された。

全日本学生選手権（男子第12回女子第5回）の期日については、昨年12月大阪で行われた全国各学連代表による会合の席上申しあわせた「11月・東京開催」案を正式に承認した。

今年度から発足が決められていた女子の東西対抗については、予定通り実施を決議。ただし今年度に限り「東海」は西日本側へ加わることになった。

このほか、「全日本学連規約」の再検討動議が出され、関東学連役員によって新案をねり、9月の東西対抗時の全国役員会にかけて改正することを決めた。

理・事・会・議・事・録

2及び3頁詳報以外の全国理事会（3月16日・東京）決定事項次のとおり。

一、一般会計予算について

原案（本誌62号3頁参照）通り承認。ただし費目については新部長において各事業計画を提出し総計四八〇万円内におさえる。

一、国内行事について

〇第21回全日本総合選手権（岩手県盛岡市）の期日は8月9日～13日に決定。

〇男子第12回、女子第5回全日本学生選手権の期日は11月26日～30日東京とし室内で実施。

一、全日本各選手権の審判員割当ては山田理事と若崎理事が佐野審判部長代行（安藤理事は渡欧中）に連絡し早急に処理する

一、各部長は原則として1日1回事務局へ連絡すること。

一、本部協会事務局員に前全日本学連会計委員原絹代嬢（今春日体大卒業）の採用を決定

一、第1回常務理事会は4月3日体協四〇一号室で開く。

今年度から本誌では評議員会常務理事会、全国理事会の議事録を適宜掲載します。場合によっては、これを「公報」としますので御精読下さい。（編集部）

"引き抜き"が話題に

全日本実連代表者会議

全日本実業団連盟は2月9日横浜で第9回全日本実業団選手権大会に出場中の各チーム代表と連盟役員による合同会議を開いた。

席上、日本リーグ問題が討議され、女子の日本リーグ開催を基本的に了承、日本協会が積極的な態度を示さない場合は、実業団連盟独自の事業として実施に踏み切ることを申し合せた。

男子のレベルアップに関しては「会社側から全面的バックアップをうけているチームとクラブ（同好会）的チーム」とに分けて二～三部制の大会を開くという提案が出され、トップチームによる一部の試合を"男子実業団リーグ"とする意見が出された。実連では近く全加盟チームから要望を聞いて（アンケート）対策をねる。

このほか、選手の転社にともなう登録上の処置について質問が出され注目された。

実業団球界における いわゆる"引き抜き"は、「職業選択の自由」という問題があるだけに統一した見解を示しにくく、田中理事長を中心に研究することとなった。

日本協会、新体制の問題点

別面詳報のとおり、日本協会は理事長制を休止し、当分の間"合議制"でその運営に当たることになった。

田村会長下の新体制はスタートから背水の陣を布いたという印象が強い。

合議スタッフの主力となる常務理事の責任が大きくなり、今後どのような活動方針を打ち出すか注目されるところだが、これまでの動きや情報を総合すると、すべての力をミュンヘンオリンピックにつながる来春の世界選手権へ注ぐことになりそうだ。

日本ハンドボール界30余年の宿願を果たすためにも、この機を逃さぬ対策が打ち出されるのは当然だろう。

渡辺副会長をはじめ河内（前パリ駐在理事）、渡辺一（第1回世界学生選手権監督）、宮崎、藤本、安藤氏ら欧州球界に精通したメンバーが並んだのもそのためとみられる。海外施策偏重という声もあるようだが、日本協会でもっとも遅れていた部門であり、その批判は当たらないだろう。

しかし、国内にまったく問題がないわけではない。

むしろ、国内課題をどう処理していくかが、合議制という新体制そのものの評価を大きく左右することになりそうだ。

特に、財源問題、事務機構の強化、日本リーグ問題を中心とした全国大会の整備と再検討、年少層への普及、クラブチームへの活路などはこの1年の間に進むべき方向を決めねばならぬ"宿題"である。

常務理事陣の企画力、行動力に大きな期待がかけられるわけが、合議スタッフの構想を実施に移す専門委員会の動きは、今後の日本協会の消長を握るといっても過言になるまい。

専門委員は4月3日の第1回常務理事会でリストアップされると伝えられているが、例年のように5月～6月から動き出すようではダメだと思う。

4月中に各パートの結束を企って、部長（常務理事）が完全にスタッフを掌握すべきだ。

専門委員会は次代の役員養成にもつながるわけであり、常務理事会の積極的な施策を待望したい。

選手強化対策委員会は、全日本男子監督の村田弘氏が委員長をつとめることになり、一応スッキリとした体制といってよいだろう。

強対委員の若干の異動、女子部門の拡充などここも課題があるにはあるが、何よりも大切なのは、日本協会が強対委の"独立性"を尊重する態度だろう。西副会長が両者のパイプ役をつとめることになったが好結果を生んで欲しい。

おおむね期待のもてる新体制のなかでフにおちないのは、企画部門と報道部門が明確化されていない点である。

企画力のなさは、ここ数年日本協会のウイークポイントである。

田村会長にただすと、企画面は合議スタッフ全員の責任でカバーするということであった。報道部門の確立がなかったことは、PR不足をなげいているだけに肯けない。

対報道の窓口は委員会といった形のものでなくてもよいのだから早急に、担当者を決めるべきだ。

ともあれ、大目標をかかえる斯界が、思い切った措置をこうじて苦難の予想されるこれからの道のりを乗り切ろうとする切迫した姿勢は、同時になみなみならぬ意欲といってもよいだろう。

田村会長の力説する"人の和"によって、たくましい前進が成就されることを祈りたい。

（杉山　茂　NHK運動部）

西日本学生選手権で開幕

関西学連は新年度役員と行事日程を次のように発表した。

なお、今年度から関西外語大、京都工芸繊維大、竜谷大の三校が新たに加盟した。

【役員】▽会長　八田昌三（関学出）▽理事長　久保義雄（同大出）▽副理事長　北村日出夫（京大出）、保和義（大阪府大出）▽審判長　前田吉弘（大阪経大出）▽委員長　児山圭一（大経大）▽副委員長　光田好彦（同志社大）▽庶務　中辻隆夫（関西大）▽会計　佐藤吉平（桃山学院）

【日程】▽第9回西日本学生選手権（4月6日～10日・大阪府立体育会館）▽春季リーグ（4月26日～5月8日・屋外）▽秋季リーグ（10月19日～11月13日・大阪中央体育館ほか）

塩沢　幹氏

日本ハンドボール協会顧問、日本体協事務局長、同理事。3月25日午後6時40分東京で心筋こうそくのため急死された。62才。塩沢氏は、昭和12～13年日本ハンドボール協会設立委員、同初代理事をつとめられ、創始期の日本ハンドボール界の発展に大きな力を残された。第二次大戦後は日本協会参与、昭和31年から顧問をつとめられていた。

田村会長に聞く



――会長としてまずなにをなさりたいか

オリンピックをめざして遮二無二突進したい。

オリンピックへ出場することが日本ハンドボール界を繁栄させる唯一の道だと思う。

オリンピック至上主義は低抗があるかも知れないが日本ハンドボール界の諸般の情勢を考えれば考えるほど、3年後に控えたこの好機をつかまねばならないのだ。

もちろん、普及―底辺の拡大といった重要な問題もあるが、ともかくミュンヘンをめざしてすべての力を結集させたい。

――ハンドボール界だけの問題ではなく日本スポーツ界としてもオリンピック至上主義はいろいろ取り沙汰されている。去年のメキシコ大会の時のように体協やJOC（日本オリンピック委）などが少数精鋭主義を強く打ち出してくると会長の抱負も楽観は許さないと想うが

たしかにそうだ。ミュンヘンまでは3年あるが、実際には来春の世界選手権が〝勝負〟である。

つまり、この1年間に一切をかけなければならない。思いたったことは強引といわれても実行するつもりだ。

1年経ったあとで、その場に応じた責任をとることは今からすでに覚悟している。

――これまでの日本ハンドボール界でもっとも欠けていたのはなにと思うか。

人の和だ。つまらぬ量見がよどんでみにくい「足の引っぱりあい」をしているようでは、いつまでも弱小団体という汚名をそそぐことは出来ないと思っていた。

役員も、真からハンドボール界の発展を望んでいるのか、自己中心の主張にこだわっているのか判らないようでは困る。

多くの人間が集まれば、同じ意見の者がおのずといくつかの固まりをつくることはさけられない。

それが派閥につながるのだろうが。いくつもの意見が常に公けの場で戦わされるようになれば、むしろ向上へつながる。会議などもテキパキ運ぶムードを私が先頭になって造りあげていくつもりだ。

――新年度の役員にはそうした期待がかけられるか

信じている。

――球界全体の団結と発展に具体的な構想はあるか

本部役員と地方組織の密接な連絡をとりあえず考えている。

これまでは本部の考えかた（姿勢）細部にがうまく伝達されていなかったように思う。そのために混乱がかなり起きていたのではないか。今後は積極的に地方へ出あるいて各地の役員と会い本部の意向を了解してもらうような努力をしたい。

――30年来の課題として〝財源の確保〟があるが

〝金づくり〟には頭を痛めている。実業団チームのオーナーから寄附をあぐおとか、各評議員から援助してもらうといった手を打つほかはあるまい。

苦しい台所ではあるが、海外遠征の際の個人負担は多くても10万円におさえたい。

――大会による競技収入などを考えてはどうか

常務理事会で検討してみよう。

――機構を変えたが狙いは

実のある活動をすることだ。

立派な機構をつくっても〝絵に描いたモチ〟ではなんにもならない。

簡素化したからといって事業が縮少されるわけではない。濃縮した仕事が敏速に行われることを期待している。

――事務局の強化は急務だと思うが

理想は専従の若い事務局長を置くことだが、なかなか人材がいない。

しかしいつまでも放置してはいられないので在京の若手常務理事などでしばらくの間動いてもらおうと考えている。

理事会などの議事録は機関誌に必ず掲載するようにしたいし、地方からの事務連絡は即日処理するシステムを確立することにつとめる。

――協会規約改正の構想があると聞くが

評議員の資格を会長、副会長にしばらず各組織、各加盟団体の理事長クラスまでおろそうと思ったが、ハンドボール人がボツボツ副会長に選出されているのでこのまま成り行きをみつめることにした。当分、大巾な改正は考えない。

――選手強化対策委員会の明文化は

専門委員会の一つとして考えてよいのではないか。しかし他のパートと性質が違うので〝強対委規程〟といったものを定めるようになるかもしれない。

――強対委の〝自主性〟をどの程度まで認めるつもりか

トップレベルの強化とその方針については全面的に信頼したい。

――技術部との関連は

体協競技力向上委員となった西副会長を中心に、技術部長（若崎重富常務理事）と強対委員長（村田弘氏）で話しあって、よりよい方向へ進めて欲しい。

強対委の代表を常務理事会などにもオブザーバーとして出席させ強化の中間報告や今後の活動を発表してもらうのも一方法だろう。

日本、チェコなどとB組に

世界男子選手権（来春）の組み合せが内定

国際ハンドボール連盟（IHF）は3月15日、バーゼルで技術委員会を開き、来年2月26日から3月8日までフランスで行われる第7回世界男子7人制選手権の地域予選と本大会の組み合せについて協議した。

その結果、地域予選は、昨年発表した組み合せと方法（本誌53号20頁参照）が、ヨーロッパの政治的な変動などで望みうすとなり、大巾な変更を余儀なくされた。そのため、予選方式のうちヨーロッパ地域の組み合せを3ケ国のリーグ方式から2ケ国による単発カード2回戦制（ホーム・アンド・アウエイ）に改めることを決めた。

また、前回の上位3ケ国を予選免除することになり（注・従来は前回1位のみ）、チェコ、デンマーク、ルーマニアの推せんが確定した。

また、アフリカ地域でチュニジアと予選を行うことになっていたモロッコは、チュニジアが出場をとりやめたため、ヨーロッパ地域へ組み入れられてポーランドと対戦することになった。

アメリカ地域のカナダ対アメリカは、去年の発表どおり進めることになり、アジア地域代表の日本と開催国フランスの予選免除も変わりはない。なお各地域予選は11月15、16日（本拠地）、11月29、30日（相手本拠地）の日程で全試合一斉に行われる予定。

注目の本大会組み合せは、正式には、12月1日に発表されるが、フランスのスポーツ紙〝レ・キプ〟は、3月19日付の紙面で、別掲のように原案が作られたと報じている。

それによると、日本は、前回優勝のチェコ、ユーゴ対スペインの勝者、カナダ対アメリカの勝者らとB組に入った。今シーズンの情勢から予選を勝ち抜くのはユーゴとカナダとみられる。決勝トーナメントへ進出できるのは各組の1、2位で2勝が必要である。

チェコは2連勝を狙って今シーズンも強力な攻守を示しており、この組での優位は動かせない。日本としてはユーゴ戦が〝問題〟である。

別面所報のとおり、日本は6月末からユーゴで開かれるタスマジヤン・カップトーナメントに出場が決まり、ユーゴと対戦するチャンスがある。

この大会で徹底的にユーゴ研究ができるのは、本大会でのよい結果につながるのではなかろうか。

第7回世界男子7人制選手権
予選リーグ組み合わせ（案）

▽B組　日　　本（アジア代表）
　　　チ　ェ　コ（前回優勝国）
　　　ユーゴ対スペインの勝者
　　　カナダ対アメリカの勝者

▽A組　ソビエト対フインランドの勝者
　　　東独対イスラエルの勝者
　　　スェーデン対ポルトガルの勝者
　　　ノルウェー対ベルギーの勝者

▽C組　ルーマニア（前回3位）
　　　西独対オランダの勝者
　　　フランス（開催国）
　　　スイス対ルクセンブルグの勝者

▽D組　デンマーク（前回2位）
　　　ハンガリー対ブルガリアの勝者
　　　ポーランド対モロッコの勝者
　　　アイスランド対オーストリアの勝者

ルーマニアが優勝

フランスでプレ世界選手権開く

来春の第7回世界男子7人制選手権大会のプレ・トーナメント（前哨戦）ともいうべき「フランス国際リーグ」が3月5日から9日までの5日間、フランスの5都市を転戦して開かれた。

出場したのは世界選手権保持国チェコ、今シーズン絶好調の西ドイツ、世界タイトル奪還を企るルーマニア、新興スペインそれに地元フランスの5ケ国。

強豪の激突に一万六千（一日平均三千強）のファンを湧きたたせる熱戦がつづいたが、ルーマニアが緒戦スペインに苦戦したことから奮起、西ドイツ、チェコの優勝候補を降して堂々と全勝優勝を飾った。

この大会前まで、ユーゴに引き分けた以外は今シーズンの国際試合で全勝を誇っていた西ドイツは第1日チェコに敗れて初めて土がつき、ルーマニアにも敗れ3位に終った。

フランスの進境も注目された地元の声援に応えて最終戦（対西ドイツ）以外はすばらしい試合ぶりであった。

個々の選手ではやはりグルイア、ポネスク、オテリア（ルーマニア）、マレス、ズーダ、クラナト（チェコ）、ルブキング、シュミット、ミューラー（西ドイツ）ファイエ、R・リカルド（フランス）、ロチエル、モレラ（スペイン）といった各国のエース級が定評どおりの快技、巧技をみせた。

特にルーマニア×西ドイツ戦では今シーズン初めてグルイアとルブキングが対決、ともに9点づつをたたき出す活躍でファンを魅了させた。

ルーマニア 18（7−7、11−7）14 スペイン
チェコ 17（8−5、9−9）14 西ドイツ
チェコ 25（12−11、13−5）16 スペイン
ルーマニア 16（8−7、8−4）11 フランス
西ドイツ 40（17−13、23−6）19 スペイン
チェコ 13−11 フランス
フランス 11（5−3、6−6）9 スペイン
ルーマニア 20（9−8、11−8）16 西ドイツ
ルーマニア 19（10−5、9−6）11 チェコ
西ドイツ 33（18−9、15−4）13 フランス

【順位】①ルーマニア4戦全勝②チェコ③西ドイツ④フランス⑤スペイン

外国情報の提供を

～ 強化対策委員会が要望 ～

選手強化対策委員会と世界選手権コーチ団では、外国チームの最新情報やデーターを収集し、各国の戦力を分析・研究、来春の世界選手権さらにミュンヘンオリンピックへ備えることを決めた。

そのため、全国のハンドボール関係者からも外国チームの情報が提供されるよう強く要望することになりまず本誌を通じて協力を呼びかけることになった。

外国チームにおける偵察活動はおどろくほど綿密に行われており例えば前回、日本チームが世界選手権に出場した時も、すでに相手チーム(西ドイツ、ノルウェー、ハンガリー)は日本の得点源である木野、飯端らの〝存在〟を知っていたという。

世界選手権前に日本が立ち寄ったルーマニア、フィンランドなどでの試合を観察していたわけである。

立地条件の悪い日本はこうした点まったく不利で、外国チームの情勢、現有勢力はまったくといってよいほど判らない。

今回の選手強化対策委の要請はそうした不備を少しでもカバーしようというもので、読者各位の絶大な協力を編集部としても大いにお願いしたい。

さしあたり、左記各項についてお心あたりのあるかたは「東京都渋谷区神南町25、日本ハンドボール協会選手強化対策委員会」まで御一報下さい。

○……○……○

一、外国ハンドボールチームの外国における試合フィルム(16㎜、8㎜)

一、外国ハンドボールチームの試合写真

一、外国ハンドボール雑誌、パンフレット、新聞記事

一、ヨーロッパに現在居住されているハンドボール出身者、ハンドボール関係者を御存知のかた。

一、この2年間にヨーロッパでハンドボールを観戦なさったかた。

一、アメリカ、韓国、中共ハンドボール界の近況を御存知のかた。

5月14日、ルーマニアへ出発

全日本男子 国際トーナメント(タスマジヤン杯)にも参加

日本協会では、さきに決定した「第7回世界男子7人制選手権全日本代表第2次候補チーム」(全日本A)を5月15日から6月下旬までルーマニアへ遠征させ、同地で強化合宿を行うと正式に発表した。一行は5月14日離日の予定。

同チームは村田弘監督(選手強化対策委員会新委員長)、勝繁夫コーチ(強対委員)、竹野奉昭コーチ兼選手(同)以下選手16人でルーマニア合宿のあと、6月27日から7月2日までユーゴで開かれる「第9回タスマジャンカップ争奪国際トーナメント」へ出場、腕だめしを行うことになった。同大会には日本のほかルーマニア、ユーゴA・B、ソビエト・フランスの各国が参加の予定。

全日本チームが、世界選手権を前に外国で強化合宿を行うのは男女を通じて史上初めてのことであり、世界選手権以外の国際公式大会へ出場するのも初めて。

ルーマニア遠征の全日本男子選手は次のとおり(=本誌既報)

▽GK福本弘、下里敏彦(以上大崎電気)、本田洋(日体大)

▽FP井上素行、近藤信行、飯田誠行、近森克彦、東一敏(以上大崎電気)、北井晴次、平岡秀雄(以上埼玉教員)、木野実(全立教)、野田清(大同製鋼)、早川清孝(湧永製薬)、藤中憲二(日体大)、有永修二(立教大)、中井武三(同志社大)

第2次候補が強化合宿

全日本男子第2次候補(欧州遠征チーム)の第1回合宿は3月22日から25日まで東京で行われた。

竹野コーチ兼選手以下全選手が揃って元気な顔をみせ、コーチ陣も村田監督、勝コーチのほか北川、渡辺、高橋(英)強対委員らが参加。日本青少年センターを宿舎に駒沢屋内球技場と大崎電気室内練習場を併用して毎日5時間の練習が積まれた。

第二次候補は5月14日の離日までにあと2回(4月中旬。5月上旬)の合宿を行う予定だが、今回の主眼は「基礎の強化、防禦力の強化、攻撃コンビネーション習得」の3点におかれた。

また、夜のミーティングなどでは海外情報などがコーチ陣から提出され、「外国チーム研究」という、これまでおろそかにされていた面でも積極的な姿勢を感じとることができた。

選手たちの気はくも、第一次候補による1月合宿の時よりいっそうの盛りあがりをみせているようで、強化対策委員会が掲げた「目標・世界選手権でベストエイトに。モットー・チームワークとお互に鍛え競いあう」に一歩一歩近づいている印象を強めた。

村田監督の話　初合宿なのでまだ選手間に遠慮勝ちなところがある。そのため小さなミス・プレーが出てしまう。遠征までの2回の合同練習でこの点をまずなくしたい。課題のディフェンス力はいい方向にいっていると思う。

「世界選手権基金」の制定を

—全日本代表候補を励ます—

東　嘉伸

第7回世界選手権大会に出場する全日本軍の候補選手が2月17日の新聞で発表され、私の目にも喜びと期待に満ちてとびこんできました。

選手諸君のたゆまぬ努力と練磨がこの栄誉を作り出したことは勿論のことですが、日本に於けるハンドボール競技をここまでに、育てて下さった幾多の先輩や師に、また共に励んだ同朋に改めて感謝しなければなりますまい。

1964年第5回のチェコ大会に出場の機会を与えて戴いた私、世界の大型チームの中にあって何と小粒ぞろいの選手団だったことでしょう。世界選手権大会で日本が初めて飾り得た貴重な一勝があったとは云え、対ノルウェー、ソ連、ルーマニア全て体格差を嫌という程感じながら悪戦苦闘の連続でした。早く日本も180糎級のチームが構成されなければとどれ程考えたことでしょう。それが何んと五年後の今日、この豪華な顔ぶれ、ずらり並んだ長身者プレイヤー、全く頼しい限りです。細い体型が多いことにいささかの心配はありますがそう一気にぜいたくも云えますまい、今後の練習によって逞しいプレーを身につけられることを期待しています。

聞くところによりますと来年度より中学校の指導要目の中に、期望の「ハンドボール」が採用されますとか。そして又候補選手が地方巡業をかねての強化合宿を行うとか、そして又四月中頃よりルーマニアの方に遠征試合に出発するとか、正にハンドボール界にとって一大躍進の重大なる時であると思えます。

ハンドボール関係者は今こそ一団となって頂点であるナショナルチームに私情を越えて声援と後援を惜しまず、そして又ハンドボール界の明日を背負う中学校チームの育成に力を注ごうではありませんか。

選手諸兄もどうか今日の喜びを単なる個人的なものとせずハンドボール界の頂点に居る責任を感じ世界の檜舞台で思うぞんぶんあばれ廻って下さい。ともすれば一般ハンドボール関係者と疎遠になりがちな選手団に、新しく企画された地方巡業の合宿練習案、是非皆んなの力で盛りあげたいものです。皆んなが選手の名前や顔をまず憶えましょう。そして時には一緒に練習もしましょう。幸いハンドボール機関誌も日本全土に往きわたっているようですから選手達の写真や紹介を色々な面から出来るだけ回数多く報導されることを望みたいものです。そうすれば選手諸君達も大いにハッスルしてくれるであろうし、おろそかにプレイも出来ないのではないでしょうか。

それと今一つ考えねばならぬことはナショナルチームに必要な基金でしょう。私は敢て提案をしたい。それはオリンピック基金があるように世界選手権基金を制定しようということです、登録の時に個人に或はチームに協力ねがえれば徴収も簡単ならば又それによって間接的に選手権に参加することになり、個々の関心も深かまろうかと考えます。

現在約千五百余の登録チームがそして約三万の人口を持つという日本のハンドボール界。このような力の結晶こそ必要な時のような気が致します。勿論個人的に多額の御寄附下さる方については大歓迎でしょうが、この際貴い力の結集として早く世界選手権基金の制定をお願いしたく思います。

云うまでもなく、一部の援助金にしか成らないでしょうが、例え国内での合宿費にでも役立てば選手だって益々張り切ってくれるでしょう。

スターを作り、基金を作り、そして中学生を育てましょう。

初めての試みである各地方協会より推せんされた多数の選手中よりさらに厳選された、今回のナショナルチームの結成に拍手を送りそして又選手諸兄の今後の苦しい練習に期待し、吾等が前途に光あらんことを望みます。

終りに役員になられた先輩諸兄に「誠に御苦労に存じますがよろしくお願いします。」と申しあげそして又今回も選手として頑張っている大崎電気・竹野奉昭君のハンドボール根性に敬意を表し、若手選手の限りなき前進を祈ります。(筆者は大阪イーグルス所属、第5回世界選手権全日本代表選手＝投稿)

ハンドボール選手の体力測定実施報告(3)

技術資料調査専門委員会

ゲームでは

ハンドボールではたえまなく走っている中でシュートしたり、ジャンプしたり、又、相手の間合いに応じて身をこなしたりするので持久性、パワー、敏捷性などあらゆる体力を必要とするものである。そして技術を支えるバックボーンとして体力をとらえる必要がある。

第三報では持久性、柔軟性そして体力では特に重視されるパワーについて述べてみることにします。

柔軟性があるということはモーションを大きくしたり、協調性を高めたり、又、傷害防止に役立つことなどからも重要であるが、他の体力面のようにあればあるほど良いというわけではなく、前に述べたことが満たされる程度あれば十分かと思われます。

持久性については今回は腕立伏臥、腕屈伸が継続して何回出来るかという筋持久性であるのでこれをもって全体の持久性の指標とするのは早計である。

循環機能の持久性をみるハーバードステップテストは、テスト方法が十分に理解されていなかったせいかデーターに信頼がおけないので報告を省略することにした。

結果と考察

第一表は各種別ごとに各項目の平均値と標準偏差値を示めしたものである。

垂直飛び、遠投（ハンドボール投げ）、体前屈、上体そらしについては全国平均値をしめし比較検討してみた。（資料—文部省体育局43年3月発表の体力運動能力調査報告書）

全国平均より総体的にすぐれているのが当然と思われるが、これらの項目についてはハンドボール投げをのぞいてかならずしもそうとは言えないのである。

柔軟性にいたってはほとんどの種別で全国平均を下まわっている。柔軟性は初めに述べたようにモーションを大きくしたり協調性を高めることなどで重要であるがこの結果から一般の人より体が硬いということは少々考えさせられることである。

ハンドボール投げにおいてはすべての種別で大きな差をもってすぐれているが、これはハンドボー

第 1 表 (1)

		中学男子			中学女子			高校男子			高校女子		
		ハンドボール		全国平均	ハンドボール		全国平均	ハンドボール		全国平均	ハンドボール		全国平均
		X̄	SD		X̄	SD		X̄	SD		X̄	SD	
パワー	垂直跳cm	50.8	7.7	45.0	37.6	6.1	35.5	56.6	6.5	56.6	41.3	5.2	38.4
	遠投m	30.7	4.3	22.9	21.8	2.7	15.1	34.5	4.6	27.9	24.7	3.2	16.4
	立三回跳	6.60	0.49	—	5.46	0.39	—	7.12	0.45	—	5.60	0.47	—
持久性	腕立伏臥腕屈伸	36.5	25.6	—	21.3	6.7	—	51.9	17.4	—	23.2	10.1	—
	H・S・T												
柔軟性	体前屈	8.7	5.3	12.1	13.7	4.8	14.8	15.4	5.1	16.3	16.2	5.1	17.8
	上体そらし	51.4	9.0	51.1	57.5	5.8	54.0	56.8	7.7	57.3	57.4	7.5	57.4

第 1 表 (2)

		大学男子			大学女子			一般男子			一般女子		
		ハンドボール		全国平均	ハンドボール		全国平均	ハンドボール		全国平均	ハンドボール		全国平均
		X̄	SD		X̄	SD		X̄	SD		X̄	SD	
パワー	垂直跳cm	58.1	7.7	58.3	45.2	4.9	39.0	57.5	7.6	—	45.0	5.9	—
	遠投m	38.5	4.2	28.2	25.9	2.4	16.3	40.2	8.1	—	29.2	2.3	—
	立三回跳	7.12	0.70	—	5.93	0.48	—	7.34	0.45	—	5.98	0.40	—
持久性	腕立伏臥腕屈伸回	52.7	20.0	—	26.4	14.7	—	43.8	20.4	—	30.5	9.6	—
	H・S・T												
柔軟性	体前屈cm	15.2	8.8	16.0	18.4	5.0	17.5	15.7	4.6	—	18.6	4.4	—
	上体そらしcm	56.5	9.2	57.6	56.4	6.3	57.5	57.0	6.4	—	57.9	6.9	—

第　2　表　　　　Rレギュラー　○その他の部員

		中学男子		中学女子		高校男子		高校女子		大学男子		大学女子		一般男子		一般女子	
		X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD
垂直跳	R	53.9	7.1	38.3	6.2	58.9	6.9	42.3	5.2	58.9	6.8	46.5	4.1	60.5	8.1	46.6	6.0
cm	O	47.4	6.9	36.9	6.0	56.0	6.4	41.8	5.2	57.3	8.5	42.7	5.2	54.5	5.9	43.6	5.5
遠　投	R	32.7	3.7	22.8	2.4	36.4	4.1	26.3	3.2	39.1	4.5	26.6	2.2	42.4	7.7	30.2	1.8
m	O	28.6	3.9	21.0	2.4	32.6	4.3	23.3	3.0	37.9	3.7	24.7	2.7	38.0	7.9	28.3	2.5
立三回跳	R	6.76	0.46	5.61	0.31	7.30	0.42	5.80	0.45	7.14	0.68	6.03	0.44	7.48	0.42	6.05	0.36
m	O	6.42	0.46	5.32	0.41	7.00	0.44	5.50	0.44	7.09	0.71	5.75	0.48	7.21	0.43	5.92	0.43
腕立伏臥	R	38.5	22.5	21.7	7.5	42.4	13.3	24.8	9.5	53.9	20.1	29.4	14.7	43.5	21.0	32.2	9.7
腕屈伸　回	O	37.4	17.0	20.6	7.3	62.0	18.4	11.9	23.3	51.3	19.7	20.9	12.9	44.2	19.7	29.0	9.1
体前屈	R	8.7	5.9	14.3	5.3	15.8	5.1	16.5	5.1	15.0	9.9	17.6	5.0	15.8	5.1	18.1	4.8
cm	O	8.8	4.5	13.1	4.3	15.0	5.1	15.9	5.1	15.4	7.4	19.7	5.0	15.6	3.9	19.0	3.9
上体そらし	R	50.5	10.0	58.6	5.6	55.5	8.1	57.0	7.2	56.9	7.9	54.3	6.1	57.6	6.7	58.3	5.2
cm	O	52.3	7.7	56.5	5.8	57.2	6.8	57.7	7.0	56.1	10.5	59.9	5.0	56.4	6.0	57.6	8.2

第　3　表

	一般男子（ハンドボール）		大学男子（ハンドボール）		日本選抜（男）バレーボール		バスケットボール日本チーム（男）		サッカー全日本60年度61年度候補		一般女子（ハンドボール）		大学女子（ハンドボール）		日本バレーボール（日紡）	
	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD	X̄	SD
垂直跳 cm	60.5	8.1	58.9	6.8	77.7	6.1	59.0	—	52.2	4.09	46.6	6.0	46.5	4.1	51.4	3.5
体前屈 cm	15.8	5.1	15.0	9.9	14.1	3.9	12.6	—	—	—	18.1	4.8	17.6	5.0	13.0	6.3

ル競技の特性上当然のことであろう。

垂直飛びにおいては総体的に全国平均よりすぐれているが中学男子、大学女子をのぞいて大きな差はなく、大学男子においては全国平均を下まわっている。

ハンドボール競技はパワーの発揮される場が非常に多い種目であり、一般の人より相当な差をもってすぐれていることが期待されたのであるが、一般の人とあまり差はないという結果に終っていることは少々ショックである。

男子と女子を比較してみるとパワーや持久性の面では男子が相当の差をもってすぐれているが柔軟性については男子より女子のほうがすぐれている。

立三回飛び、腕立伏臥については全国平均にその項目がないので比較することが出来ないが、全項目について発育段階に応じてみてみると総体的に中学から高校の間では、大きな発達がみられ、高校から大学の間ではその発達は減少し、大学から一般の間では発達は停滞していることがわかる。

でこれらの体力面の発達は形態面の発育と相関しているように思われるが高校から大学、大学から実業団の体力面の発達の減少は体力トレーニングを重視し、採用することによって増大が期待される。

第2表は各種別ごとに各項目にわたってレギュラーとその他の部員の平均値と標準偏差値を示したものだ。垂直飛び、遠投、立三回飛びについてはレギュラーがその他の部員よりすぐれている。しかしその他の項目においてはレギュラーがかならずしもすぐれているとは言えない。

何回も述べるように柔軟性はモーションを大きくすることや、協調性を高めたりすることに役立つ程度にあれば良いのであって他の体力面とその点違っている。このことからレギュラーとその他の部員との間にあまり差がみられない結果が出ているのであろう。

レギュラーとその他の部員の間に大きな差のみられるのは主に垂直飛び、遠投、立三回飛びのパワーの面であり、このことからパワーとチーム内での技術評価とはかなり相関があるのではないかと思われる。

第3表は一、二表と同様に一般男子、大学男子のメンバーと、東京オリンピックのバレーボールの選抜チーム、バスケットボール日本チームとサッカー全日本60年、61年度候補選手と比較し、又、女子については一般女子と大学女子のレギュラーメンバーとバレーボールチームと比較したものである。

ハンドボール競技で養なわれた体力と他の競技で養なわれた体力を比較するのは興味のあるところである。

全ての項目にわたって比較検討したいのであるが、ここでは同様のテスト項目が他競技にはないので垂直飛びと体前屈について比較検討することにします。

男子

垂直飛びについてはバレーボールが他の三競技より非常に大きな差をもってすぐれている。これはバレーボール競技の特性上当然のことと思うが、それにしてもハンドボールの一般男子と一七、二cm大学男子と一八、八cmの差をもっていることは驚くべきことである。

バスケットボールとはほとんど差がなく、サッカーより相当すぐれている。これはハンドボール競技のゲーム構造とサッカー・バスケットボールのそれとくらべるとき理解できると思う。

体前屈についてはハンドボールが他の二種目よりすぐれた値を示している。

女子

男子とほぼ同様の傾向であるが垂直飛びについてはその差は小さく柔軟性についてはその差が大きくなっていることがわかる。

まとめ

今まで三回の発表をとおして感じることは日本ハンドボール界の体力状況について、手ばなしで喜べる状態ではないということである。ハンドボール投げにおいては確かにハンドボール競技の特性上非常にすぐれているが他の項目についてはそれほどすぐれていないのである。技術と体力は相互に関係しあっており、技術を評価する時、別個に考えられないものである。ゲームで豊かな体力に支えられた技術の発揮はゲーム自体をすばらしいものにするであろうし、ひいてはハンドボール界の発展にも寄与することにもなる。

我々は体力の面においても非常に大きな可能性を持っている。各個人やチーム、そしてハンドボール界の将来を考える時、この面のトレーニングも重視しなければならない。

なにはともあれ今回の体力測定によってハンドボール界にある課題をなげかけたことは確かである。この測定実施にあたっては数多くのチームに協力をいただき感謝にたえません。

今後とも五段階評価の規準を作成するなど継続していきたいと思っていますのでよろしく御支援をお願いいたします。

<おわり>

技術部の専門委員である技術資料専門委員会の皆さんに三回にわたって、昨年行なわれたハンドボール選手の体力測定の報告を連載していただきました。

こういった資料がこれまで作られていなかったことに問題はありますが、ここでこういった資料が公けにされたことは大きな意味があるものと思われます。

今後、これをいかにして、生かしていくかは、各選手、各チームのコーチの問題となりましょう。

多角的な見地から強化が叫ばれている今日、このような資料が公けにされ、ハンドボール選手の弱点、良い点がはっきりしてきているのですから、足らない点は重点的に強化し、良い点は大いにのばし、どの面をとってみても、トップレベルにあるハンドボールの選手が多くなるように望みたいものです。

今度の調査を見て感じるのは、標準偏差がきわめて大きいことです。ということはバラつきが大きいということを意味しています。本当にバラついているのなら問題ですが、測定方法によるものならこれまた問題です。同じ測定者が全部を測定するのが理想でしょうが、中々そうもいかないと思います。

地味な仕事ですが、大切な仕事だと思います。せっかくここまでできたものですから、ぜひとも、続け、より完全なデーターが毎年作られ、大いにこのような統計ががっちりと作られることが望まれます。色々な面での制約はありましょうが、今後の活動を大いに期待したいものです。

日体協の課題とハンドボール界

アマチュア規定改廃問題に端を発して新春から日本スポーツ界には多くの問題が投げかけられている。日本体育協会の一員としてハンドボール界も傍観することは許されない。われわれの立ち場を通して一連の問題を考え結びつけてみよう。

（編集部）

1、中学生の対外試合規制緩和

新文部次官通達案

小・中・高校生のスポーツ対外試合を規制する現行文部次官通達の改廃問題は、文相の諮問機関である保健体育審議会の学校体育、社会体育合同分科会で検討されていたが3月4日の会議で「新文部次官通達」の原案を討議、これを「中間答申案」として体協など各方面の意見を聞いて5月末までに「最終答申案」を作ることになった。

「中間答申案」の主な点は中学生の対外競技参加範囲を〝隣接県の競技会〟から〝数県の競技会〟に広げたほか、これまで原則として禁ぜられていた中学生の全国大会参加も地方教委、各競技団体、中体連、体協の自主的な申し合せで認めることとしている。

また、この「中間答申案」で注目されるのは新たに〝社会体育〟を盛りこんだ点だ。

これは学校外の責任ある団体が開く競技会にも小・中・高校生の参加を認めることにしたものである。

▽……体格の発達、交通事情など社会的条件の好転によって、昭和23年に出された文部次官通達は時代遅れの感が強まっていたわけだが、今回の答申案によってかなり改正されることになりそうだ。3月5日付の毎日新聞は体育行政の〝思想革命〟とさえいっている。

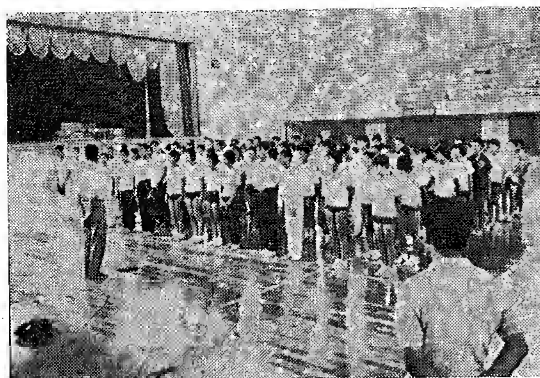
特に中学生のスポーツ活動の緩和は注目されるものがあり、「経費がかからない。保護について十分配慮する。学業に支障がない。主催者として教育関係機関などが加わる」などの条件と態勢が確立されていれば学校教育活動外のスポーツ（競技会）への参加を認めているのもたしかに新しい考えかただ。

▽……これらをハンドボール界にあてはめてみると、市大会、県大会止まりだった中学校の競技会を県対抗、ブロック大会場合によっては全国大会まで拡大することができるし、スポーツ（ハンドボール）少年団による県外試合や大会といった〝学校単位〟外の催しもOKされることになる。

「次官通達」についてはハンドボール界が苦い経験を持っていることを覚えておられる読者も多いだろう。

昭和37年ごろからハンドボール少年団活動の積極化を推進していた日本協会が、昭和41年2月の全国評議員会で、その年の夏柏崎市において「ハンドボール少年団全国交歓大会」を開くことに決め発表したところ文部省から「待った」がかかった一件である。

▽……文部省側が「具体的な内容が決まってから再検討する」ことで一応その場を過ごしたが、体協の日本スポーツ少年団活動とは別個に、競技別の性格が強いスポーツ少年団の全国大会には反対という文部省の意向を日本協会が察知してこの計画は結局実現されずに終っている。夏休みを利用したスポーツ少年団のハンドボールキャンプは、当時としては画期的、独創的な計画であり、成功すれば底辺拡大に躍起となっていた斯界に一つの妙薬ともなり得たであろう。この坐折は今考えても惜しいものである。



▽……さて、昨年12月の「中学校学習指導要領案」への復活につづき今回の答申案など、中学ハンドボール界はにわかに脚光を浴びる存在となった感じだが、現在軌道にのった活動を示しているのは愛知茨城、山口、福島といった地区のようだ。特に愛知は古い球史を誇り近年の充実ぶりもめざましい。

昨夏の県大会には男子57、女子37校がエントリー。「ハンドボール王国・愛知」の一つの支えにもなっている。

ハンドボール少年団の方は、神奈川（横浜）、新潟（柏崎）、大阪（豊中）、長崎（佐世保）あたりの動きが活発なようで、昭和41年9月には横浜で全国交歓会も行われている。

地域的な活動としては昨年8月東海協会が蒲郡市の愛知教育委員会キャンプ場〝さがら山荘〟を使って「東海地区ハンドボール少年団交歓会」＝写真＝を開き成果をあげている。

▽……ところで、いまのところ日本協会は中学ハンド

ボールの全国大会や少年選手権といった大会の構想を具体的には持っていないようである。
中学におけるハンドボール部の設置は「中学校学習指導要領」(本誌61号詳報)への復活でかなり上昇する見込みだ。
底辺拡大の期待はそちらにかけられている(かけている)とみてもよいのだろう。
通達緩和の〝利用〟については「正式に発令されてから考える」態度のようだが、当分の間はブロック大会までではなかろうか。
水泳、フィギュアスケート、テニスといった競技とちがうこともあるが、ハンドボール界には〝中(小)学校競技者〟の競技力向上はあえて増大する必要もないという考えが強い。
もともと教育的効果が高く評価されている種目だし、年少層には親しんでもらうことを奨励するだけで結構、というわけだ。
しかし、時流を考えれば中(小)学校におけるハンドボールをどの方向に伸ばし、進めるかについては早急に専門委員会を編成し、慎重に日本協会としての〝態度〟を決めることも必要ではないか。
▽……〝社会体育〟としてのハンドボールの普及をむしろ推進すべきだという声も一部にある。
どこまでが学校体育か、あるいは社会体育とはなにかといった論議がかわれさている昨今だが、ハンドボールの〝知名度〟がこれまで学校体育のみに限られていたことだけは事実である。
社会体育が再認識されるこの機をとらえて、その面での晋及と効果をPRすることもたしかに必要であろう。

2、大学スポーツ連盟結成の機運

体協では三月末の役員の改選を機に、現在日本オリンピック委員会(JOC)の下部機構である日本ユニバーシアード委員会(JUSB)を学生スポーツ振興のための独立の機関に組織を改める方針である。
これは現行のJUSBを発展的に解消、競技団体の各学連に大学体育会を加えた〝大学スポーツ連盟〟結成へ向う布石として注目される。

□……全日本学生ハンドボール連盟の組織づくりにようやく手が打たれようとしている時期だけにこのニュースはその〝促進剤〟の役目を果すことになりそうだ。
全日本学連は卒直に云えばこれまで名だけで実のともなわぬ存在
国内のトップチーム(男)をほとんどかかえながら組織としてはまったく態を成しておらず、破たんを招かないですんだのは下部組織である各地区学連と、最寄りの地方協会の努力によってカバーされて来たからだ。
□……昨年あたりから〝全日本学連〟としての活動を確立すべきだという声が強まり、西敏郎会長が卒先して全日本学生王座の存廃問題、国際事業の積極化などを推進したが、組織そのものの固めができていないため、構想から実現までによけいな時日がかかっている。
これは理事会(執行機関)さえも満足に編成せず、事務局の存在もアヤフヤといったルーズな運営に大きな責任があるわけだ。
□……このような状態がつづけば第1回に参加したきりの世界学生選手権にも、いつまでたっても出られないであろうし、今回伝えられたような「大学スポーツ連盟」が組織されたとしても、ハンドボール界だけは統一した見解はもとより役員名簿さえも提出できそうにない。
3月8日東京で開かれた全国会議(各地区学連代表者会議)では規約、組織などの再検討動議が提出されたが、日本学生スポーツ界に仲間入りするためにも早急に行動を起こすべきだ。
□……現行全日本学連規約のうち改正が検討される最大点は、役員陣の充実である。
「各地区学連から1名の理事と委員のほか、加盟校5校につき1名の理事と委員を選任する」というのは一時代前には適切な規定であったが、現状に当てはめると70人近い人数となりかえって散漫な運営を来している。縮少と云うより濃縮措置が必要だ。また事業として「国際的交流」の一項が追加されることになろう。

訂正

前号記事中、次の部分を訂正します。
▽2頁　全日本選手名のうち近藤克彦は近森克彦、中井武三選手の所属は同志社大。
▽5頁見出し「千代理事長…」は「初代理事長に山田計氏」の誤り。
▽6頁最下段本文1行目　北区福付出井頭町は稲付出井頭町
▽23頁　木下選手の年令は37才。
▽24頁4段目7行目　石樽詔之氏は石槫詔之氏の誤り。

3、国体改革「年令別」採用か

日本協会の保坂周助副会長が委員長をつとめている国体開催基準要項改訂小委員会はこのほど「国体の将来構想（案）」＝中間報告＝を出した。それによると各競技種目とも種別を年令別に改める。地域予選会をふくめて参加都道府県数が24に達しない種目は成績採点の対象からはずす。地域予選会の地域区分の各競技共通化。チームゲームの構成人数などの検討が指示されている。

国体委員会はこの報告にもとずいて新年度から競技団体地方体協などと折しよう、早ければ7月頃には第一次改革案を決める方針である。

○……国体が曲り角に来ている—この声はもう数年前から聞こえている。

国体委員会が〝新しい国体〟の構想をねっているのも4年ごしのことだ。

今回の報告でいちばん影響されるのは各競技種目と種別を年令別に改めるという点であろう。

○……国体のハンドボールは現在一般男女、高校男女、教員の5部門だが、これを一切廃止し「19才未満による少年の部（男女）」と「19才以上の成年の部（男女）」にしてしまうというのが今回の考え方である。

できれば来年の岩手大会から実施したいと伝えられている。

少年の部は19才までと規定されているが学制でいうと大学2年生までが含まれる。

ハンドボールの場合、大学生の国体出場を男子は認めていず、女子も一チーム3名以内と限定している。このルールが移行されるようだと、少年の部に出場できるのは男子の場合高校生と、高校を出て2年以内の社会人ということになる。

利点としては、これまでその所属がハッキリされていなかったために活躍の場をせばめられていた高専や専門学校生も出来ることだろう。

○……成年の部は必要な時はさらに年令階層を分けてよいとされているが、これは陸上競技、テニスなど個人競技に適用されるとみてよい。ハンドボールの場合は現行の一般と教員の部の合体だ。国体から教員を一切はずし、別に〝教員総合体育大会〟を開くという意見も一時伝えられたが、今回の中間報告は特にこの点については触れられず検討事項に留っている。

女子実業団などは18、19才の主力選手もおりこれらの選手は資格を失うことになる。（それらの選手はOGとして少年の部にまわるわけだ）

○……ハンドボール界の一部にはこの改訂を機に、成年の部は男女とも実業団連盟の所属チーム、所属選手をはずしたらどうかという意見がある。

そうなれば斜陽のクラブチームが再び活路を見出すであろうし、特にいわゆるOGの意欲が燃えあがるだろう、というのだ。

日本協会としてクラブに対する良策を打ち出していないだけに〝国体の利用〟は考えられてよいだろう。

○……チーム構成人数については本誌62号でも既報のとおり、ハンドボールは本年度からのルール改正で「一チーム12人」と決まったが、国体だけはこれまでどおり11人に制限し、参加人員のぼう張を防ぐことになっている。

4、「体協アマ規程」廃止問題

体協は2月14日、現行の「日本体育協会アマチュア規程」（昭和32年改定）を廃止、これに代るものとして体協およびJOCが主催または後援する競技会について「大会参加規程」を新設することになった。

なお、各競技団体が主催する競技会に参加する選手の資格は各競技団体が属する国際連盟（IF）の規定に準じた「各競技団体アマチュア規程」にのっとって処理されることになる。

これによって一部の競技団体の選手はプロとの交流や、賞金のかかった大会に出場できることになる。

▽……ハンドボール界には国内外とも「プロ」というものが存在しない。

賞金の懸けられた大会もこれまで1度も開かれていない。

したがってアマ・プロ問題がひきおこされた例は皆無といってよいだろう。

プロがいないのだからハンドボール界には「アマチュア規程」がないと思っている人が案外多いようだ。

アマチュアとはアマチュアの定義づけを示すものであって、プロを対象に考えられているものではない。

「日本ハンドボール協会（JHA）アマチュア規程」は昭和32年11月に制定、ルールブックに載録されている。

当然のことながら「国際ハンドボール連盟（IHF）アマチュア規程」に則したものである。（両規程とも後掲）

▽……今回、日本体育協会がアマチュア規程を廃し、単なる「参加規程」にしぼったのは、アマチュアというものの解釈、定義づけが各国際競技連盟（IF）によって異なる現状に処すためである。

したがって、ハンドボール界は今後とも日本協会の事業に関してはIHF＝JHAのアマチュア規程が適用され、国体、高校総合体育大会（インタ・ハイ）など体協の主催する事業に関してはJHA規程と、体協の定める「参加規程」の適用を受けることになる。

現時点ではプロの存在がないだけに今回の問題はハンドボール界にとってあまり大きな影響はないわけだが、この機に改めてアマチュアの精神を認識することもムダではなかろう。

国際ハンドボール連盟アマチュア規程

1 スポーツへの関心のみでハンドボールに参加する者はすべてアマチュアである。

2 次のものはアマチュア資格を喪失する。

a 報酬をうけ、あるいは物資的利益を得るために選手としてハンドボール試合に参加する者はすべて。しかしスポーツに対する特別の関与のために、あるいは達成された功績のために提供された記念品はその額が国内連盟によって定めた額をこえてないならば利益を得たと考えられない。

b 国内連盟の承認なしに非アマチュア選手と一緒の、または非アマチュア人と対抗の試合に故意に参加した者。

c 直接、間接の報酬のためにハンドボールの監督またはコーチとして働いた者。

公・私の教育施設における体操およびスポーツの教師は除外される。他方、国内連盟が、報酬を得てハンドボール競技を教えることに資格を与える専任アマチュアコーチに許可を与える際には、アマチュア資格を失わぬという規則の例外を認めることができる。ただしこの報酬はコーチの年間収入の重要な部分を占めてはいけない。

d 獲得した賞品を売却、入質交換、賃貸または報酬をうけて呈示するもの。

e 競技収入の全部または一部がスポーツ上の目的、または国内連盟の事前の同志を得た慈善的目的以外の目的で、使われるような競技にその役目を指導し実行管理者のような役割を果たす者。

f 物質的利益を得る意図で、競技者としての名前、写真、スポーツの能力を掲載する目的に利用されることを許す者。またはその道具、器具を商店に利用させることによって報酬を受け取る者。

3 アマチュアは、試合に該当する名前を備えていない限り、賞品または土産物を獲得するために試合に参加してはならない。

アマチュアは、試合に際して往復旅行中、および試合中に汽車、船舶、寝台車、まかない費、宿泊の実費の支払以外に他の形で金銭または補償金を受け取ってはならない。

いかなる場合にも、汽車または船舶の1等費用、1等寝台料金、食事および宿泊の正当な費用以上は支払われる事はできぬ

しかし、国内連盟は試合に参加する事によって休業した労働賃金に対して補償金を割当て、または支払いを許可する権限を有する。

この補償金の最高日額の決定は国内連盟の権限に属する。

不必要に延期された労働の休暇に対する補償金は支払われることができない。

失われた労働賃金に対する償は、他のいかなる形式でも禁ぜられる。特に次の事は許されない。

a 練習中に失われた労働賃銀に対して補償金を支払う事。

b 補償金を家族に払いこむ事またはアマチュア規定の精神に他の方法で違反する事。

事実に反する申立をして、不当な補償金を要求する競技者はアマチュア規定に違反する。

競技者は、クラブまたは協会によって補償を受けるコーチの指導を受ける事ができる。同様に競技者は練習中またはケガをした場合に、マッサージ師または専問家の世話を要求できる。

事故の際には、競技者はクラブまたは協会が保険料を支払う保険金支払を受ける事ができる

もし競技者が負傷し、保険がつけられていないか、または保険金がすべての費用をカバーしないならば競技者は、国内連盟の同意を得てクラブまたは協会から物質的な援助を受ける事ができる。

競技者は受けとった補償金全部の明細な受取証を出さねばならない。この受取証は、常に国内連盟に整理されておらねばならない。

4 国内連盟は審判員に特別な同連盟によって定められた規定に基いてその活動に対して補償を支払い、または支払うことを許可する権能を持つ。

5 クラブまたは協会において報酬で雇われる人の給与は、行われる労働に対しその土地で習慣的に与えられる給与と、明白に不均衡であってはならない。選挙された相談役は国内連盟の同意がなければクラブまたは協会で雇われる報酬を受けとることはできない。

6 現行の規定を守らない者は、すべて非アマチュアと見なされハンドボールの全競技から除外される。またアマチュアハンドボール組織会長として非アマチュア人を使う事は禁ぜられる。

ただし、国内連盟は情状を酌量し違反競技者に警告を発し、あるいはアマチュア資格を奪う代りにある期間、競技から除外することで罰する事ができる。

更に国内連盟は事情がそれを証明する場合にはかなりの期間後にアマチュア資格を再び与え

る権利がある。

7　もし国内連盟が現行の規定に従わないならば、IHFは個々の場合を調査した後に、該当協会に対して必要な措置をとるものとする。

（編集部注・本文は日本体育協会昭33・3・31発行「国際競技連盟規約集」から転載したものである）

日本ハンドボール協会アマチュア規程

（昭32. 11. 1制定）

▽第1条　この規程でアマチュアとは純粋にスポーツの立ち場からハンドボール競技に関係しているものをいう。

▽第2条　日本ハンドボール協会並びに地方支部協会（以下「本会という）の会員はハンドボールによって得た地位域いは資格を資本化して下記の各号に掲げる行為をしてはならない。

1．商品または製造業者から報酬をうけてその商品もしくは器具を使用すること。

2．商品または製造業者による商品もしくは器具の宣伝広告のために自己の名をその利用に供すること。

3．本会の許可を得ないで商店または製造業者の主催または後援する競技会等に出場すること。

4．自己の執筆しない新聞または雑誌の掲載文に氏名を貸して謝礼として金品の授与を受けること。

5．本会の許可を得ないで演劇および劇映画等に出演すること。

▽第3条　本会の会員が他の団体もしくは個人から依頼を受けてハンドボールを指導する場合はその所属する団体の許可を受けねばならない。

▽第4条　本会の会員は、競技の参加又はその準備のために欠勤しそのため給料の支払が受けられなかった理由で、その補いのために金銭を受けたり請求することができない。

▽第5条　本会の会員が競技または講習に参加した場合は別に定めるアマチュア旅費規程の範囲内において、支給される旅費のほか他のいかなる費用も受けることができない。

▽第6条　この規程により会員に支給される費用は直接会員に渡さずにその会員の属する団体に支払うのを原則とする。

▽第7条　左の各号に該当するものはアマチュアの資格を失う。

1．報酬を受けるためにまたは何等から物資上の利益のためにハンドボール競技に参加したもの。

2．日本ハンドボール協会の許可を得ないでアマチュア以外のものと競技したもの。

3．直接又は間接に報酬を受けてハンドボールのコーチを行ったもの。ただし教職にあるものがその学校の職務としてハンドボールを指導する場合をのぞく。

4．競技で獲得した賞品を売却、入質、交換もしくは賃貸または報酬を受けて呈示したもの。

5．本会の所属する団体以外の団体が、競技による収入を目的とする競技会を開催した場合に、その競技会に直接又は間接に参加したもの。ただし、競技による収入が本会の許可を得て慈善的な目的に使用される場合はこの限りでない。

6．第5条規定により旅費の支給を受けたものが長期にわたり専業化した場合。

▽第8条　前条各号の規定に違反してアマチュアの資格を失って非アマチュアの判定を受けたものが再びアマチュアの資格を得ようとする場合は左の各号に載ける条件をそなえたうえ本会アマチュア資格審査委員会の承認を受けなければならない。

1．非アマチュアの判定を受けてから満2ケ年を経過していること。

2．悔意の情が明かで再び非アマチュアの判定を受けるような行為をしないという誓約をすること。

▽第9条　この規定は本会に加盟しているすべての団体の会員の全部に適用され、違反者は除名される

附則1　本規程は昭和32年11月1日より施行する。

　2　アマチュア旅費規定は日本体育協会アマチュア規程に準拠する。

　3　アマチュア資格審査委員会に関する規定は別に定める。

日本体育協会アマチュア規程旅費規定

1．旅費は汽車1等料金以下、汽船1等料金以下、急行料寝台料、自動車料共実費

2．宿泊費は1日2500円以下

3．食卓料は1日500円以下

4．雑費1日1000円以下

審判技術の思想統一企れ

実現不可能でない理想論

光島磯雄

2月9日横浜での全日本実業団大会の屈指の好カードである女子・大洋デパート対大崎電気のゲームを観戦する機会を得た。

このゲームは予想にたがわぬ激戦で、結果はシュート力にまさる大洋の圧勝におわったがゲーム内容については、点差のわりにはもり上りと迫力にかけるように感じられた。

両者の勝利への執着心のはげしさのあまり負傷者が続出し、一種異様な雰囲気さえ感じられ、後味の悪さののこるゲームであった。

本大会から複審制が採られ、相互に別々の角度からの判定によるゲーム運行によって、従来よりある審判技術の諸問題解決への第一歩を印したわけであるが、はじめてのことでもあり、本大会でみた限りでは、依然として二人でも一人でも同じといった状態で、まだ模索の域を脱しきれないのは当然といえよう。

ただ、本試合においての負傷者続出、特に大崎電気の一選手の顔面からの出血をおしての出場継続の場面が展開されている最中、観客の眼は同情と驚歎とひんしゅくの入りまじった感じて、此の点に関しても審判の処置は果して適切であったかどうかは 問題であろう。

ハンドボール競技の特性として簡易性、速攻性、得点期待性の大きさなど他種目競技にはみられぬ魅力を持つと考えられるのであるが、ふりかえって考えれば、ハンドボール競技の持つ諸弱点には、

「退場にならぬ程度の反則は要領よくした方が得である」

「ボールを要領よく回せば時間稼ぎが出来る」

「審判にみえぬように反則する」

「審判によってプレーの仕方を変える」といったプレーの裏面的常識の問題が亡霊の如く出現するのである。

もちろんこれに対するルールの規制は厳然とあるにはある。しかしながら近来のハンドボール技術もしくは理念というべきものは、国際交流などで年々長足の進歩を示し、かつまたミュンヘンオリンピックを目指し数多くの努力がなされている今日において、審判理念の問題点は関係者の努力にもかかわらず十年一日の如く思われるのは真に残念な事である。抽象的な表現ではあるが、女子に限らず近来のハンドボールのゲーム内容は年を追ってキタなくなりつつある現実を指摘することによって証明ともなり得るのである。

勝利を目指する気持のあまり、右にあげたような事柄を「うまくやりさえすれば良いのだ」もしくは「一人二人の退場は覚悟のうえでゲームする」といった態度が此の頃特に目立つと感じるのは私だけだろうか。

「技術の進歩」「勝てるチーム」「強いチーム」などということがとりもなおさず、「粗暴行為を敢えて行なう」とか「故意の反則を多くやる」ということに関係があると感ずるのは果して独断であろうか。

聞くところによると、府県内の試合では審判が厳正に吹いていてもインターハイに行けば、「それでは通用せず、勝てぬ。キレイごとばかりでは駄目だ」などと感想を浅らす高校監督がいかに多いことか。

たとえどんなにはげしく押されようと、突かれようと、つかまえられようと、血を流すとも、それにひるまず突進せよとおしえねばならない現実のなんときびしいことか。

大学や実業団の上位チームのプレヤーならば一応それに対処出来る心身を備えてはいるであろうが高校生以下にそれを要求するのは安全管理にかなっているのかどうか。また将来はあのようなことが出来るようになれとすすめるのが教育的なのかどうか。

競技者、審判ともどもルールに忠実に、しかも競技運行を円滑にという平凡な常識、すなわち「フエアプレー」精神が往々にして二律背反的現象をさらけだすのである。

日本の審判技術は決して他国に劣らぬすぐれたものであると聞くが、現実には欧州遠征経験で国際傾向の片鱗をかじって来た選手達のプレーなどに引きずりまわされていはしないか。

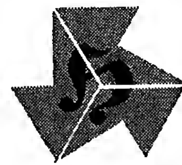
実現不可能ではない理想を言うならば、日本協会審判部は、審判技術の思想的統一を早急の任務として完成し、それをひっさげて国際的なものにまで押し上げて行くという壮大な気概を持つ方向に進んでほしいものである。

要するに、ハンドボール競技には、簡易、速成等の面は数々の長所があり、絶対に将来性に富む性格を持っていると信じて居るものの、そのわりに普及発展が遅いという事実については、内部構造的不合理性の改善が気付かれていないからではあるまいかという疑問もわいてくるのである。他にもいろいろな理由もあるのであろうが手近な問題解決の着手に時期尚早とは言えないであろう。

そして、競技者は、そのあるべき姿として、「いかにして反則をせずにプレーし、いかにして反則をされずにプレーし得点するか」の境地に達するという大目的を念頭に最大無限の努力を傾けることをとくに吟味していただきたいものである。別の言葉を用いるならば、ハードゲームとラフゲームの区別を追求するということであろう。

ここにおいて、相手側がどうあろうと冷静かつ沈着に対処するという言葉がはじめて生きてくると言えるのである。（投稿。筆者は大阪府立八尾高教諭）

高体連、20周年を迎う ①



全国高校体育連盟ハンドボール部（高体連）が創立20年目を迎えた。

設立当初から日本ハンドボール界を支える大きな柱、大きな底辺としてその発展の歴史を刻みつづけて来た「高校ハンドボール界」の努力の跡、栄光の道をたどってみよう。（カットは全国高体連ハンドボール部のシンボルマーク）

（編集部）

高校界が、日本ハンドボール界を支えているという根拠をまず数字でみてみよう。

昨年度日本協会登録チーム総数は一四四六。このうち高校は一〇〇七（男六一二、女三九五）と七割弱を占めている。女子はなんと八割五分が高校チームだ。

10年前、昭和34年度の資料はこうなっている。総登録数六三六、高校四一四（男二七六、女一三八）。やはり七割近い。＝数字はいずれも日本協会発表のもの。

これが競技人口―いわゆる登録選手数になると、さらに高校界の占有率は高くなる。

いわゆる一般部門は一人の選手の重複登録を認めており延人数になるわけだが高校の場合は〝一人は一人〟である。正確な数字は整ってないが、一昨年の日本スポーツ人口調査（体協・42年発表）の結果では日本のハンドボール人口の八割が高校選手（男女）であるとされた。

このデータは、20年間ほとんど変動がないとみてよいだろう。

現在高校選手は全国で約二万、これまでに輩出した競技者数は約15万と推される。日本ハンドボール界にとって実に貴重なしかも〝偉大な〟数字である。

高体連の努力なくして、斯界の底辺は短時日にこれほど深大な構成をとげることはできなかったであろう。

高体連20年の慶びは、日本球界の喜びであり、その前途への大きな期待は、斯界の繁栄の道につながると云ってよい。

中学球界（戦前）が前身

高体連20年の足跡をふりかえる前に、その〝前史〟にふれておかねばなるまい。

高校スポーツの前身ともいうべき中学（旧制）スポーツは第二次大戦前の日本スポーツ界における大きなささえであった。

ハンドボールの場合は、日本協会そのものの歴史が比較的浅く、わが国の各スポーツがそうであるように、まず、東京の大学で普及の芽が育ち、次第に各地の中学や専門学校、師範学校、高等女学校に浸透、そうした層の確立ができあがりかけたところで第二次大戦となってしまった。

したがって、戦前の中学ハンドボール界の動きは、わずかに昭和15年10月と17年10月に東京で行われた2回の「全日本中学選手権」をあげるにとどまる。

15年の第1回大会は、第11回明治神宮体育大会の一種目として行われたもので、全国から7校が参加、青山師範（東京）が東邦商（愛知）を5―3で破り優勝、第2回大会（昭17）は明治神宮体育大会からはなれ、8校参加のもとに開かれた。豊中中と天王寺中の大阪同士が決勝へ進み、6―4で豊中中の優勝が決まった。

昭和16年頃から大阪中学球界の活動はめざましく、その努力が実を結んだわけだが、この〝力〟は終戦後にまで引きつがれ、昭和21年から始められた国体の中学男子（23年から高校男子）は、最初4年間大阪代表がは権を握りつづけることになる。

強かった高女チーム

戦前の中学女子はほとんど記録に残るような動きは示されていない。15年と17年の大会も男子だけだ。

当時の女子界の代表的存在は高女チームで、第3回全日本選手権（昭15）から新設された女子の部の優勝は倉敷高女（岡山）、以下梅花高女（大阪）、日体（東京）、静岡高女の順。第4回全日本選手権でも倉敷高女が制し、2位は津山高女（岡山）、以下日体、梅花高女であった。

戦時中は、女子ハンドボールのみが奨励種目として残り、高女や専門学校の間で活動がつづけられた。

ほそぼそとしたものではあったが〝高女時代〟が戦時中の球史の空白を辛うじて埋めていてくれたことは、戦後の球界再興にどれだけの力づけとなったことだろう。

当時の関係者の労苦を偲びたい。

国体に中学部門参加

男子の大阪が戦後にまで力を保っていたのに対し、女子は岡山と大阪勢が強味をうけついだ。

こうした努力を〝全国的に開花〟させる機会は意外に早く訪れた。国体である。

西宮を中心として開かれた第1回国体（昭21）にハンドボールも参加、一般男子東西対抗、学生学西対抗、女子トーナメント、中学男子トーナメントの4部門が行われた。

中学の全国大会は17年以来4年ぶり。全国4ブロックの代表がさつそうと姿を現した。

中学ハンドボールの復活と同時にこれは、史的な系統として高校ハンドボールのスタートともいってよいものであろう。4チームによる戦績は

▽1回戦（＝準決勝）

豊中中（近畿・大阪）16（7―0 9―0）0 沼津中（東海・静岡）

倉敷工（中四国・岡山）6（5―0 1―2）2 重機工（関東・東京）

▽決勝

豊中中 11（4―0 7―0）0 倉敷工

であった。

4地域とも予選を行っているがその内容は詳らかにしない。

これらの試合がキッカケとなって、各県で中学大会がしきりと行

われるようになり、22年7月には東京で「第1回東日本中学選手権」が開かれ、男子は重機工（東京）、女子は平塚高女（神奈川）が優勝した記録がある。もし国体が実施されていなければ各スポーツの復興はかなり手まどったと思うし、戦前に実績の少ないハンドボールはなおさらであったろう。

特に、中学ハンドボール界を刺激し、指導者、選手一体となって国体をめざしたことは、ハンドボール界そのものの〝団結〟にも大きく作用した。

第2回国体（昭22・金沢）から中学部門には女子も加わりいっそうそのムードに拍車をかけた。

学制改革によって中学ハンドボールから高校ハンドボールに移行される時には、各県、各ブロックですでにかなりの下地ができあがっていたのである。

東西対抗の実施

23年から新学制によって新制高校が発足した。学徒対外試合に関する文部次官通達が出され、中学の全国大会は認められず〝高校スポーツ〟が新しく登場して来た。

ハンドボール界も各所で高校生の新しい大会の構想がねられた。

その第1弾は1月25日神宮（当時はナイルキニックスタディアム）で行われた「東西対抗」である年度からすればこれは22年度の事業であったが、中学球界から高校球界へのバトンタッチという意味でも記憶されてよい。

一般、学生とちがって東西とも単独チームによる対戦というのが特色、みたかを変えれば「全日本高校（中学）王座決定戦」ともいえた。

記念すべき2試合の結果は

▽男子

世田谷工（東京）	5	0–2 4–2 1–0 0–0	4	倉敷工（西・岡山）

▽女子

倉敷高女（西・岡山）	7	4–1 3–0	1	第一師範（東・東京）

男子は中学であったが、女子は前述のように中学・高校界のオーバラップ時期であり高女時代を引き継いだような感じである。（注・第2回以後の東西対抗については次号）

新制高校そのものが軌道にのる見通しがつくと県内大会はもちろんブロック大会の開催も積極的に進められ、23年度内には「東北高校」「東海4県高校（現東海高校選手権の前身）」「近畿高校（現近畿高校選手権とは別）」「中国地区高校（現中国高校選手権の前身）」の各大会が発足している。

東日本中学選手権が同高校選手権と改称、呼応するかのように西日本高校選手権が第1回を西宮で開いたのもこの年である。

国体の中学部門も高校部門と呼ばれるようになった。

高体連結成への機運はこうして着実に醸成されていったわけだ。

ところで、現在の高校ハンドボール界とはほとんど縁がないのだが22、23年の2回京都で「全国インター・ハイハンドボール」が開かれている。

いわゆる旧制高校の大会で、第1回は大阪高校が甲南高校(兵庫)を11－1で降し、第2回も大阪高校が5－4で浪花高校（大阪）を破って勝者になっている。特につけ加えておきたい。

全国高体連の結成へ

24年に入ると「高校ハンドボール界」はいっそうの地固めが行われた。

特に東日本、西日本両大会を東西対抗へ結びつけるようにしたことは、球児たちの目標をさらに高いところへ向けさせた。

また、各県で高校総合体育大会が開かれるようになり、高校スポーツの横のつながりが生まれはじめた。

県高体連からブロック高体連を経て全国高体連、各種目別に分かれた縦の関係も次第に浮き彫りされて来た。

全国高校体育連盟ハンドボール部の胎動は順調であった。

正式発足への準備委員会が編成され、各地からスタッフが集った者としてこの道ひとすじに歩まれた人ばかり。中には戦前の中学大会関係者の顔も見えた。

いずれも〝中学〟時代から指導

第1回全日本高校選手権

昭和25年。全国高校体育連盟ハンドボール部は正式に発足した。

日本ハンドボール協会にとって全日本学生連盟（23年に結成）につぐ二つめの加盟団体である。

初代部長は河島武四郎氏（現日本協会顧問）、副部長（理事長にあたる）は馬場太郎氏（前日本協会副会長）だった。

連盟活動の、というより日本ハンドボール界の消長をも左右するであろうと予測された「第1回全日本高校選手権大会」は25年8月8日から12日までの5日間、大阪藤井寺球技場で開幕された。

大会前、関係者の尽力で男子に高松宮殿下から、女子に同妃殿下からそれぞれ優勝杯が下賜されることになったのは大きな喜びであった。

「力・技・明朗な精神」―高体連三つのモットーのもとに集った全国の代表は男子53、女子32校、選手役員あわせて千三百人であった。

当時、日本協会の下部組織（地方協会）は北海道など37協会。この大会には男子は31、女子は21都道府県から代表が送られていた。

第1回とあって出場数のワクもかなり広げられ、地元大阪が男女とも4校づつ参加させたのをはじめ、岡山が男3女2、兵庫が男4女3、愛知が男4女1、福岡男2女3といったように各県とも予選のなかからトップチームをえりすぐっていたが、逆に東北ブロックは4協会（現在は6協会）からわずかに男子の盛岡高（岩手）が参加したのみというアンバランスな面もあった。

普及状態もさることながら交通宿泊など社会的条件もかなり影響していたのではないか。

8月8日の開会式には高松宮殿下が臨席され『ハンドボールの全国的な普及は終戦後であり、特にここ一年の間に急激に発達したいわば新興スポーツであると承知しておりますが、今日の参加チームは男女85校に及んでいると聴き、このスポーツが如何に私達に適合性をもっているかを考え、輝かしい前途を祝福する次第であります』というおことば（主旨）を述べられた。

三つの会場を使って炎天下の熱戦は第1戦豊中（大阪）―甲府(山梨）から決勝までの全85試合がすべて高校生らしい若さと力にあふれたものだった。

それ以後20年間、たゆまぬ努力と限りない前進をとげるわけだがそれらの詳細は熱戦の回顧とともに次号へゆずろう。

フランスの技術研究(18)

速攻は第一の得点源

訳・藤　本　　強

フランスの技術研究も回を重ねて、すでに17回を数えた。

技術編、戦術編にわけてとりあげてきたが、一応、今回と次回で終了にしたいと考えている。この技術研究をどのような形で、続けていくかは、現在考慮中であるが、何らかの形で、外国の技術を紹介する覧は続けていくつもりである。

今後は種々の形で発表されているものを折にふれとりあげていきたいと考えている。

☆　☆　☆

今回は、反撃速攻について紹介をすることにしたい。

昨秋来日したネデフ氏は、攻撃を四期にわけて説いていたが、今回とりあげるのは、ネデフ氏のいう第一期、すなわち、第一線の速攻、敵が十分帰陣しないない間に守備側より多い人数で行なう速攻について触れる。

ネデフ氏はこのあと、これで攻めきれない場合に、第二線の速攻（守備側が帰陣していても、十分に守備体形が整っていない間に攻める）を第二期の攻撃として、定義し、更にそれでも攻めきれない場合のセット・オフェンスからの攻めの準備期間を第三期、攻撃側も守備側も十分に体形を第三期で整え、それからする攻撃を第四期として説いていた。もっともな考え方であろう。

ここで紹介するのは、上級チーム同士の間では、帰陣が早く、なかなか実行不可能であろうが、多くのチーム同士の試合では、もっとも簡単に大量点をとることができる方法であり、すでに各チームがそれぞれ実際の試合に使用していることを整理するぐらいの意味しかないものと思われる。

しかし、ごく簡単な方法で大量点をとるには、これを十分に練習し、しっかりと安定したフォーメーションをチームとして、身につけておくべきである。

速攻でもっとも重要なのは、スタートと適切なタイミングとスピードをもったランニングパスであろう。

速攻がスタートをするのは、二つの場合が考えられる。

一つは相手のパスをインターセプトもしくはドリブルカット、相手ミスを拾って、速攻するという形である。

他は相手のシュートをキーパーがとめ、キーパーボールからの球出しによって、スタートするという形である。

前者の場合には、多くは相手の逆をつく形となり、独走の場合が多くなるので、いきおいドリブルで進む形になる。このときのドリブルはとにかく早く相手のゴールにつき進むことが必要となるのであるから、最大限のスピードがでるよう、ボールを前に前に出し、それを走って追いかけるドリブルをすることが望ましい。

シュートはこの場合、ジャンプシュートになることが多いものとも考えられる。このジャンプはできるだけ高く、遠くにとびこみ、ゴール近くでボールを放すようにする。

腕の位置をかえることもシュート率を良くすることになろう。肩から、腰から、アンダースローからなどと形をかえシュートすることも必要であろう。またキーパーとのかけひきも重要である。オーバースローのシュートをするとみせかけ、アンダーシュートをしたりする。シュート・フェイントも折を見て使うことも良い。

もっとも攻撃的な守備フォーメーションである3－3防禦法をひいた場合には、3人にインターセプトの可能性が生まれ、この3人で反撃速攻による得点を重ねることができよう。

キーパーボールからの場合にはまず、もっとも肝要なのは、スタートである。

図1に例をとると、攻撃側チームの右サイドのA4がシュートモーションに入り、ボールが手を離れた瞬間に、守備側のシュートされたサイドの逆のサイドに位置している選手DIは、シュートが入ろうが、キーパーボールになろうがおかまいなしにスタートをきる。DIはサイドラインぞいに全速力でとびだす。ややして、シュートの結果を見、キーパーボールになっていたならばやや中に入りながら、味方の選手と相手の選手の動きを良く見て、キーパーからのボールを受け、ノーマークだったならばシュートを行なう。

この時に相手がいたならば、キーパーととびだした選手とのコンビが問題になる。相手の左にとびだすか、右にとびだすかをとっさに判断し、キーパーはそこにボールを送らないと、折角のチャンスもムダになってしまう。

この場合、判断がつかないならば、後列の中央に守備の際に位置している選手にパスを出し、ここから、攻撃の芽を作ることも良いことである。

第2図、第3図には、守備が1人で、攻撃が2人の場合の例をとりあげた。第2図はストレート、第3図はクロスした場合であるがいずれも、1人のボールをもった選手が守備側を十分に自分に引きつけておいてから、パスをするということが重要になる。

ここで中途半端な形でパスをすると、速攻を止められたり、逆にインターセプトされたりの悪い結果が生じる。

ドリブルはなるべく使わずに、早いランパスでつなぎ、相手を十

分に自分にひきつけ、絶対に他の選手につけない形にし、しかも、パスを自由にできるギリギリのタイミングでパスをすることが重要となろう。

またこのような場合、時折はパスフェイントをし、自らドリブルで進むことも必要になろう。

要はボールをもっているものの個人的技術ととっさの判断が得点にするかしないかに非常に大きな影響を与えるのであるから、守備をつけた練習をしっかりと行ないチームとしてのタイミングをしっかりと身につけ、たとえ、自分のパートナーを見ないでも、パスをできるコンビネーションを作りあげておくことが必要となろう。

また、折には、ブロックプレーも、ノーマークをより確実にするためにも必要となってこよう。

4図は3人の攻撃側と2人の守備側という形の例であるが、この場合も攻撃側が絶対的に有利なことは云うまでもない。

ただ1人人数が多いだけに、守備側にも攻撃側にも多くのバリエーションがでてくる可能性が大きく、その場合のタイミングのとりかたがやや難しくなるが、完成されたランニング・パスの形さえもっていれば、むしろ2人対1人よりも、より確実に得点することができよう。

ボールをもっているAがディフェンスのどちら側かにつっこみ、ギリギリのタイミングでBかCにパスをすることは2人対1人の場合と同じであるが、BもしくはCのどちらかあいているかを十分に見定め、もっとも良いタイミングでパスをしなければならない。

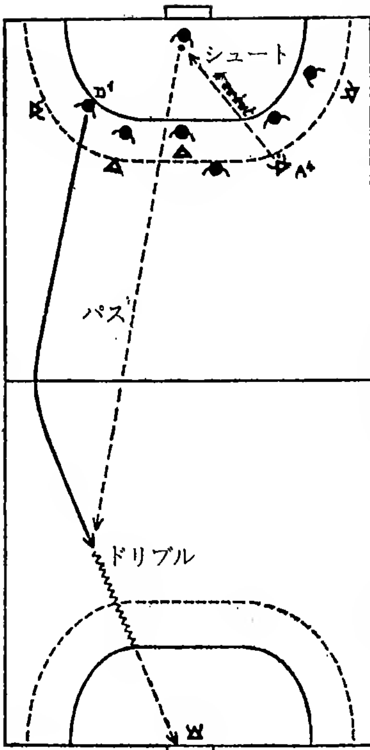
この時パスをされなかった選手をスピードをおとさず、守備の1人がどうしてもその選手をマークしなければ、ノーマークになるというようなコース、スピードで走ることが必要であろう。

この場合にも、パスフェイント守備側のタイミングを外すパスなど種々の技術を駆使し、ノーマークにすることを十分に練習しておかなければならない。

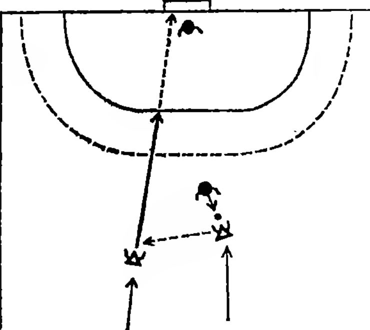
反撃速攻を成功させるかどうかは試合を左右するといっても過言ではない。今回のはじめにもいっているように、もっとも少い労力で破壊的な得点をとることができるのは反撃速攻が一番である。

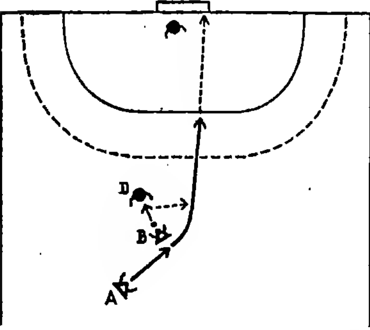
反撃速攻のコツはスタートと、ランニングパスにある。何よりもスピード、それについでタイミング、これを十二分に練習することが重要となろう。

それと、フットワークを使ったインターセプトこれがあれば、強力なチームとなることは確実であろう。

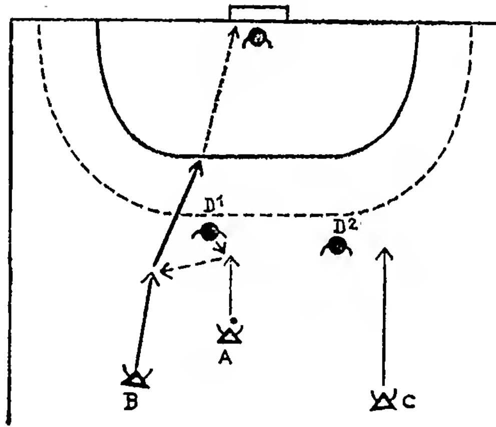


1


2



3



4

★☆★☆★☆★☆★

海外トピックス

―――藤本　強―――

東ドイツが優勝

女子選手権〝代行〟大会

昨年12月の世界選手権が流れ、それに代る大会として企画されたブカレスト杯女子国際リーグ戦がルーマニアの首都ブカレストに、ユーゴスラビアソビエト連邦、東ドイツ、ハンガリー、ルーマニアA・Bの5ケ国6チームを集めて開かれた。

これは世界選手権に参加することになっていた9ケ国から、チェコと西欧圏の西ドイツ、デンマークと日本が抜けたことになる。

現在の女子のトップレベルにある東ドイツ、ユーゴー、ソ連が参加して、5日間にわたって、総当りリーグ戦で行なわれた。

第4回世界選手権で予想されていたとおり、東ドイツ、ユーゴー、ソ連の3ケ国の大激突となり、東ドイツはソ連と引き分け、ユーゴーに一点差で勝利を握り、みごとに優勝を飾った。昨夏のザグレブ杯にも、この三ケ国が一、二、三位を占めている。この時はソ連、ユーゴー東ドイツの順序であったが、今回は、東ドイツが波にのり、雪じょくをとげた。

女子球界はここしばらくの間、ソ連、ユーゴー、東ドイツを中心に動くものと考えられる。ルーマニア、ハンガリー、チェコのかっての名門はややとりのこされた感がある。

東ドイツ　15（7―4　8―5）9　ハンガリー

ユーゴースラビア　15（8―4　7―2）6　ルーマニアB

ソ　連　10（6―2　4―5）7　ルーマニアA

ユーゴースラビア　10（6―5　4―3）8　ハンガリー

ルーマニアA　17（9―4　8―4）8　ルーマニアB

東ドイツ　11（6―6　5―5）11　ソ　連

（引き分け）

東ドイツ　8（4―3　4―4）7　ユーゴースラビア

ソ　連　20（16―6　4―6）12　ルーマニアB

ルーマニアA　16（7―1　9―11）12　ハンガリー

ユーゴースラビア　19（8―7　11―4）11　ソ　連

ハンガリー　10（5―5　5―4）9　ルーマニアB

東ドイツ　8（3―3　5―3）6　ルーマニアA

ソ　連　16（6―8　10―4）12　ハンガリー

東ドイツ　18（11―5　7―7）12　ルーマニアB

ユーゴースラビア　11（6―6　5―4）10　ルーマニアA

勝敗表

	勝	敗	分	得	失
東ドイツ	4	0	1	60	35
ユーゴースラビア	4	1	0	62	43
ソ連	3	1	1	68	60
ルーマニアA	2	3	0	56	49
ハンガリー	1	4	0	51	66
ルーマニアB	0	5	0	47	80

東ドイツの抜群の守備力がめだっている。ソ連は攻撃力では超一流のものをもちながら、ザグレブ杯当時よりも、守備力にかけ、東ドイツに優勝されてしまった。

試合はすべて、ブカレストのフロレアスカ屋内球技場で行なわれ審判はスイスのガブリエル氏、オランダのキールホーン氏が主として当り、ルーマニアの国際審判員が補助するという形で行なわれた毎日多くの観衆がつめかけ、盛会のうちに大会はおわった。3強は次のようなメンバーで戦った。

東ドイツ　ツォーバー、ローゼシャンデンク、ホッホボルド、バウアン、グロセ、ビンクラー、リヒター、ヘルマン、ブラウン、ホニッヒ、マイスナー

ユーゴー　イストバノビック、ロジク、グルセビック、バイノビック、サマルジヤ、ニンコビックジャジク、トマセク、ラダコビック、クネゼビック、ソンジク、カラバティク、レベルニャク、ゼジャク、ツォブコ、テディク

ソ連　ソコロバ、オタホブスカジャ、ザバノバ、メメドバ、ノズコバツルシノバ、カンハンサン、ボブロオメルスク、フレアコバ、コノセンコ、オセバ、ツィビー、ビスンスカジャ

ルーマニア・西ドイツ戦の反省

ルーマニアのニコライ・ネデフ氏はルーマニア男子チームの西ドイツでの2敗（本誌既報、17―22 18―24）について次のように語っている。

西ドイツのチームについて、私は非常に良く知っているが、今回2度の敗戦はスコアの面だけでなく、西ドイツのプレーヤーの技術という点でおおいに驚かされるところがあった。

かってなく、西ドイツはスピードのある攻守を見せた。チームとしてもすばらしいスピードをもっていたし、個人的にとってみても非常に進境いちじるしく、技術的にすぐれていた。

守備の方法も非常に印象的なものであった。希にみるエネルギッシュな動きを見せていた。

ルーマニアについていうならばキャプテンのグルイアを欠いており、これが大きくチーム力に影響していたことは否めないが、しかし、ガツ、モルドバンの成長が見られたことはきわめて嬉しいことであった。

今後もスコアには、あまりこだわらず、内容を高める試合をおおいにやっていきたい。多くの国際試合を今年も計画している。

一方、西ドイツでは、この二つの勝利を非常に喜んでおり、正にいきけんこうたるものがある。

しかし、勝ってかぶとの緒をしめよという心構えを忘れずに、各選手についての批判を行なったりチーム全体としての批判をし、次の試合に備えるなど、一つ一つの試合を基礎に強化につとめている様子がはっきりとうかがわれる。

それぞれの選手の課題、チームとしての好い点、悪い点を徹底的に批判し、向上しようとする努力が続けられている。

このような努力がなされ、またそれをすなおにうけいれているところに今日の西ドイツの隆盛の一因があるものと思われる。

今後のオリンピックは各国の努力と国際世論の動向によって決まる

IHFの競技委員であるジーグフリード・ペライ氏はミュンヘンオリンピックにハンドボールが入った事情について触れ、またミュンヘン以後のオリンピックでハンドボールが行なわれる可能性について考えている。

その際、ミュンヘンのオリンピックにハンドボールが入ったのは何といっても、開催国である西ドイツの努力とIHFの働きかけが大きかったとし、結局は、IOCの委員に対して、それぞれの国で働きかけをすることおよび国際的にポピュラーなスポーツにハンドボールが成長することが第一だとしている。

ミュンヘンでは、8月29日にハンドボールは開始され、閉会式2日前の9月8日に決勝が行なわれることになっている。

このようなかなりゆったりとした日程がとられているので、女子が入っても十分に日程を消化しうるとしている。女子が入るか入らないかは今後の大きな課題となるが西ドイツでは大いに努力がなされている。

ミュンヘンでハンドボールが行なわれることは、今後のハンドボールのオリンピック参加に対しても大きな影響がある筈であり、これを利して、ハンドボールがオリンピックの中で常に行なわれるように国際間におけるハンドボールの地位を高めることが必要であるとペライ氏は説いている。

ミュンヘンでは女子の競技も

1972年のオリンピックで男子の7人制ハンドボールが行なわれることははっきりしているが、女子はまだ未決定である。そこで西ドイツでは、来日したトルカ氏らが中心となり、何とか女子の競技をも行なうように盛んな働きかけを行なっている。

オリンピックで女子の競技が行なわれることは、始めてのことであり、女子のハンドボールもオリンピックで行なったということを球史の中に入れることは、今後のオリンピックのハンドボールの地位に大いに関係してくる。今後オリンピックで行なわれるときでもハンドボールは男子だけというのは、いかにも片手落ちな感じであり、どうしても、ハンドボールがオリンピックで開催される場合には、男女開催という線をここでしっかりと打ちだすことはハンドボール界にとってきわめて重要なこととなる。この意味に於ても、各国協会は、国々のIOC委員に十分に働きかけて、男女開催、いつでもとりあげられる競技にハンドボールを成長させるようにしてほしいと西ドイツ関係者は呼びかけている。

ノルウェー スウェーデンを破る

古豪スウェーデンがノルウェーに破れるという番狂せが北欧にはおこっている。国際試合はきわめて盛んに行なわれおり、国際間の力の差は全く甲乙つけ難く、馬場氏の欧州だよりにもあるように各国の強化はすばらしいものがある。ノルウェーといえば、日本が世界選手権で勝ち星を二つあげることのできた相手であり、ヨーロッパ諸国内では、二流どころだ。そのノルウェーがスエーデンに遠征し、スウェーデンを破っているのだから今冬の各国の力は判断がつきにくい。

ノルウェー 15（7−6 / 8−6）12 スウェーデン

最近のユーゴ球界

ユーゴは男女とも大いに力をつけてきているが、盛んな国際試合とともに、国内のリーグも例年どおり行なわれている。

男子は14チームで総当りリーグが、女子も同じく12チームで総当りリーグが行なわれた。

この国のもっとも名の知られているチームには、パルチザン・ブジェロバール、メドベスカク・ザグレブ、あるいはかって来日を希望したディナモ・パンチェボなどが男子にある。

一方、女子は、ロコモチバ・ザグレブ、ORKベォグラードなどが良く知られ、またかって来日が噂されたポドラブカ・コプリブニカなども名のとおったチームである。

男子は、今シーズンは古豪がふるわず、パルチザン・ブジェロバール、メドベスカク・ザグレブは三位、六位、ディナモ・パンチェボは5位とふるわなかった。

優勝はボラク・バンジャ・ルカとRK・スルベンカの間で争われルカが10勝2敗1分、スルベンカが10勝3敗で、勝ち点にすると僅かに1点の差でボラク・バンジャ・ルカが優勝を飾った。ブジェロバールは8勝2敗3分、続いてGRKザグレブの8勝4敗1分、ディナモ・パンチェボの8勝5敗、メドベスカク、ザグレブの7勝5敗1分と続き、それぞれが勝ったり負けたりの複雑な勝負を見せている。最下位のボレス、ティトフベレスが0勝13敗についに白星にめぐまれなかったほかは、13位のムラダ、ボズナ、サラジュが4勝9敗というのであるから、激戦のもようが判ろう。また、91試合のうち、引分が7試合も見られることも、いかにレベルが一致しているかを示していると云えよう。

一方、女子はロコモチバ・ザグレブ、ORK・ベオグラードがともに無敗でシーズンをおわるという、激戦であり、得失点差もザグレブがプラス97、ベオグラードがプラス81と圧倒的であった。結局10勝1分のザグレブが9勝2分のベオグラードを押え、栄冠を握った。三位は7勝2敗2分のコプリブニカ、四位は得失点差で前者に破れたスロボーダ・ベルグラード以下最下位のエル・ムラドスト・ニシュが2勝9敗とこれまた男子におとらず、レベルが一致していることを示している。ユーゴーの層の厚さを見せつけている。

世界選手権の日程

フランス協会では来年の第7回世界男子7人制選手権の日程を2月26日から3月8日と正式に決めた模様。なお会場については公式の発表は行われていないが、会場の一つになるパリのクーペルタンスタデイアムは大会に備えてこのほど拡張工事がはじめられた。

馬場太郎氏の欧州だより④

2m越す選手も…………長身揃いの各国

前々回でもお知らせしたようにアイスランドの進境は今シーズンヨーロッパ球界の大きな話題である。

アイスランドは、これまでBクラスにランクされていた。世界選手権の成績を見ても第4回男子7人制（昭36・日本が初参加した大会）に6位入賞を唯一回記しているだけだ。

それがめっきり力をつけて各国からマークされるようになったのは、やはり〝ミュンヘン〟があるからであろう。

そのアイスランドがファン注目のうちに対スウェーデン（2月7日、ヘルシング）、対デンマーク（9日、ヘルシンガー）の2試合を行ったので出かけてみた。スコアは、

スウェーデン 16（8－6 / 8－9）15 アイスランド
デンマーク 17（7－8 / 10－5）13 アイスランド

この2試合を通じて得たアイスランドの印象は、ともかく「若く大きい」ということである。

他の国のナショナルチームならばおそらくジュニアに属するであろうハルステインセン、ジョンソン、マグヌソンら19～21才の選手が主力。しかも2mを越す〝巨人選手〟が二人も加っているのには驚かされた。

トレーナー（監督）も若く「可愛い奴」といった感じである。

それだけに試合運びはベンチ、選手ともに一本調子。波に乗った時は西ドイツ、チェコなどとはちがった迫力を示すが、肝心の時に若さから来るもろさが目立つ。

対デンマーク戦では、前半の僅差を後半20分までキープしながら21分12－12と追いつかれると、とたんにペースが乱れ、残り2分間に2人の退場と4本の7MTをとられる始末だ。

巧いディフエンスが条件

結局この7MTが致命傷となってアイスランドはデンマークに敗れたわけだが、この試合に限らず7MTは男女ともほとんどベンチで待機中の7MT要員によって射たれている。

この〝専門家〟たちは私の見たかぎりでは一〇〇％的中。反則（7MT）をとられることが即失点を意味するわけで、いきおいディフェンスのレベルアップを心がけるようになって来る。

前回の世界選手権で日本の課題はディフエンスにあると反省したが（編集部注・馬場氏は団長として参加）、巧くきれいなディフェンスがトップチームの重大な条件といえよう。

だが、ヨーロッパ各国のプレーはすべてがきれいに運ばれているわけではない。

特にフランスは荒い。2月15日ザールイスの新設体育館で行われたフランス対西ドイツ戦でもフランスは激しい体当りを見せ、この国のイメージとはほど遠い品の悪さを印象づけられた。

よく云えば「野武士の風格」なのだろうが、やはりハンドボールの持つスピード感、スマート感はかなりスポイルされる。

この試合はフランスにとって今シーズン9試合目、西ドイツにとって18試合目の国際試合。

西ドイツ 23（13—5、10—6）11 フランス

西ドイツはいぜん勝ちっ放しである。

この遠征には、一昨秋来日して妙技を見せたGKデュエルが久々に加わり、後半から出場した。

FP陣ではルブキングがやはり抜群、9点を叩きだしムンク、ミューラーも好調だった。

斗将シュミット欠場の穴を埋めたシュマッケが1m94の長身を利した豪放なプレーで活躍したのは注目されよう。

フランスは既報のデンマーク戦よりはまとまりが出て来たが西ドイツの堅城を崩す力はとうていない。R・リカルド、ガランド、エチエベリらの健斗が目立った程度である。

審判はルクセンブルグ協会から派遣された二氏がつとめたがマイ氏52才、フォンック氏42才というベテランであった。

スピード誇る長身選手

シュマッケ（西ドイツ）、アイスランドの2mプレイヤーなど各国には必ず1m90以上の選手が加えられているのは驚異的なことであった。

日本ではようやく1m80台のアタッカーが出て来たところだが本場ではそれを上廻っているのだ。

ルブキング（西ドイツ）と並ぶ世界の巨砲グルイア（ルーマニア）は1m94、89K。グネス（ルーマニア）1m97、96K。スペインにもルレナ1m92という21才の新星がとび出して来ているしこのほかリラルジエ（フランス）1m92、ワイン（ベルギー）が1m91を誇っている。

もちろん長身かならずしも最良とはいえぬが、その迫力、威圧感は相当なものだ。しかもこれらの選手がスピードのあるプレーを存分にこなしているのは見逃せない。

ディフェンス力と長身選手が〃世界〃を制する不可欠な両輪と断言できるだろう。

史上かってない2m選手を擁したアイスランドの将来については各国関係者も「恐しいチームになるだろう」と口を揃えており、今後の成長が興味深い。

高い日本への関心

アイスランドは、来春の第7回世界選手権途次、ぜひ日本チームに立ち寄って欲しいと希望している。

日本への関心は各国ともなかなか深い。

特に女子に対する評価は高いようだ。

来日の希望も多くスウェーデン、ルーマニア、西ドイツ（いずれも男子ナショナルチーム）がなかでも積極的だ。フランスはまとまりかけた日本遠征の話が流れたとかで残念がっていた。

世界選手権（男子）で日本が二度つづけて破ったノルウェーもちがった意味でわが国に注目している組である。

デンマーク対アイスランド戦後審判を担当したノルウェー協会役員と話す機会を得たが『これまでのチームとはちがう。今度日本と顔が会ったら必ず勝ってみせる』と意気ごんでいた。

事実、今シーズンのノルウェーチームは思い切った若手の起用が当たり、新鮮な戦力でフランス、スウェーデンなどを降している。

ノルウェーには勝てる、という気持ちを日本の関係者は捨ててかかるべきだろう。

ハンドボール史の新しい発見

ところで今回の訪欧で、私はデンマークを6回も訪れた。

これには実は理由がある。ハンドボールの世界史、国際史上デンマークが非常に大きな、しかも注目すべき存在であることを発見したからだ。

歴史の書き替えということは相当の抵抗もあろうが、はっきりとした「確証」を持って帰りたいと考えている。

見る者を圧倒する国際試合の迫力、底なし井戸のような深く広い各国の競技者と組織などを見聞するとともに、この「ハンドボール史の新しい事実」をデンマークで見出したのは大きな収獲と考えている。

〃ミュンヘン〃の情報

さて、約半年に亘る私のヨーロッパ体育・ハンドボール研究の旅も最終のコースに入るが、この「たより」のむすびとして、ミュンヘンオリンピックに関する二、三の情報を書き加えておこう。

ミュンヘン、オリンピックのハンドボール競技については、すでに昨年10月メキシコシテイで開かれた国際オリンピック委員会（IOC）総会でその一部が報告されているが、現時点では男子のみ実施という線が強い。女子の採用について国際ハンドボール連盟（IHF）最高首悩陣があまり積極的でないことに不満の声がヨーロッパではチラホラ聞こえている。

（編集部注・女子が採用された場合、出場国は男女合わせて16ヶ国内とIOC総会で決議されている。）

競技方法は4ケ国づつ4グループに分けた予選リーグのあと各グループの同位者同志によって1～4位決定リーグ（決勝リーグ）、5～8位決定リーグ、9～12位決定リーグ、13～16位の決定リーグを行うという案の実現が濃い。

会期は昭和47年（一九七二）8月26日開会式。ハンドボールは8月29、31、9月2、4、6、8日の6日間。前半3日間が予選リーグ後半3日間が決勝及び順位決定リーグとなろう。

会場は現在新設中の大体育館（一万人収容）が使用される模様。

ともあれ、晴れのミュンヘンオリンピックまであと3年余。

日本の精進同よう、あるいはそれ以上にヨーロッパ各国はトップレベルの充実に取り組んでいる。

36年ぶりに訪れたこの機会をつかもうと、すさまじいばかりの気迫で強化が進められていることを改めてお伝えし、ヨーロッパからの球信を終わりたいと思う。

（完）

【馬場太郎氏は3月4日帰国されました。御多忙にもかかわらず本誌のためヨーロッパ球界の最新情報をお送りいただいたことに誌上から御礼申しあげます。編集部】

ハンドボールの歩み（第11回）

第一回大会はチェコが優勝

ヨーロッパカップ編①

前回まで10回にわたって、世界選手権の男女について連載をしてきたが、今回からは世界選手権とともにＩＨＦの主催によって行なわれるヨーロッパ杯争奪戦の歴史をふりかえってみるつもりである。

本年は残念なことに、ソ連のチェコ侵入によってひきおこされた国際紛争のあおりを受けて、この大会は中止になっている。

後に触れるように本大会は第一回は都市対抗であったが、二回目以後にクラブチーム対抗に変っており、選手にとって、世界選手権大会でプレーすることが最高の栄誉ならば、チーム（クラブ）にとっては、国内大会で優勝をし、ヨーロッパ杯争奪戦に出場し、そこで好成績をあげることが何よりもの目標となっている。

第一回大会は1956年

男子の7人制ヨーロッパ選手権の第一回大会は1956年から1957年の冬季間に都市対抗としてはじまっている。

女子は男子に遅れること4年、1961年に開始されている。

ヨーロッパ杯がはじまって以来世界選手権が開催される年に当るとか、他の種々の事情で行なわれなかったのが、1957〜1958、1960〜1961年、1963〜1964年にかけての冬季の男子本大会は世界選手権大会とシーズンが重なるために行なわれていない。

男子は9回、女子は8回

昨年の冬の大会を入れ、男子は9回、女子は8回の大会が行なわれている。

男子では、ＦＡ・ギョッピンゲンの輝やかしい二連勝を含め、西ドイツのチームが3回、チェコのチームが2回、ルーマニアのチームが2回、スウェーデン、東ドイツのチームがそれぞれ一回ずつの優勝を飾っている。

一方、女子は、シャルギリス・カウナスの二連勝を含み、ソ連が3回、ルーマニアが2回、チェコ、デンマーク、東ドイツのチームが各一回栄冠を受けている。

特筆すべきことは、1965〜1966年かけて、東ドイツ、しかも同じライプチッヒ市のチームである。男子のＤＨｆＫ・ライプチッヒと女子のＳＣ・エンポル・ライプチッヒがともに優勝したことであろう。

7人制は以上の概略のように、長い歴史をもっているが、11人制のヨーロッパカップの歴史はきわめて浅く、昨年の夏にただ一度行なわれただけである。女子は全く行なわれていない。

しかも、チーム数も、男子7人制の場合、ヨーロッパ各国から、20以上も優勝チームが参加して行なわれているのに対し、11人制の場合には、僅か4チームと少なく両者の球史においてもつ意味は大きく異なってこよう。

クラブ同士、しかも各国大会で優勝したチーム同士で争われるヨーロッパ杯争奪選手権は今後も球界の大きな大会として、発展していくことになろう。

二回戦方式は1963年から

また、4回大会までは、男子は一回戦によるトーナメントで行なわれていたが、1963年に行なわれた第5回大会からは準々決勝と準決勝は2回戦方式で行なわれるようになり、1966年の第7回大会は一回戦、準々決勝、準決勝が二回戦方式、更に67年、68年の第8・第9大会からは決勝を除く、すべての組み合せが二回戦方式で行なわれるようになってきている。

女子ははじめは、決勝戦をも含めて、二回戦方式で行なっていたが、1963年の第三回大会からは決勝は一回戦方式で行なわれてきている。

第一回大会は都市対抗でプラーグが優勝

第一回ヨーロッパ杯争奪戦は都市対抗によって行なわれた。1956年の暮から、翌57年の春にかけ、ヨーロッパの各地で行なわれている。

チェコのプラーグチームが準々決勝、準決勝であったルーマニアのブカレストチーム、デンマークのコペンハーゲンチームを連破して、東ベルリンには僅差で、パリには大差で勝ち、決勝に進出したスウェーデンのオレブロ市チームを破り、優勝している。世界選手権では、スウェーデンが破竹の勢いで二連覇しているところである。東欧時代の幕開けともいうべきプラーグ市の優勝であった。

▽予選（於 リェージュ）

リェージュ（ベルギー） 15―9 エッシュ・アルゼット（ルクセンブルグ）

▽一回戦

ハスロッホ（西ドイツ） 27―8 リェージュ（於 ハスロッホ）

パリ（フランス） 18―14 バルセロナ（スペイン）（於バルセロナ）

ブカレスト（ルーマニア） 13―12 ベルグラード（ユーゴ）（於 ブカレスト）

▽準々決勝

パリ 18―15 ハスロッホ（於 パリ）

オレブロ（スウェーデン） 15―12 東ベルリン（東ドイツ）（於 東ベルリン）

コペンハーゲン（デンマーク） 22―12 カトビッツ（於 カトビッツ）

プラーグ 24―19 ブカレスト（於 プラーグ）

▽準決勝

オレブロ 30―17 パリ（於 オレブロ）

プラーグ 25―18 コペンハーゲン（於 プラーグ）

▽決勝 1957・3・9パリ

プラーグ 23―21 オレブロ

結局、デンマーク、スウェーデンの代表チームを連破したプラーグに栄冠はもたらされた。翌年は世界選手権が行なわれ、スウェーデンが二連覇をなしとげた年に当り、日程の関係で行なわれず、第2回戦は1958年から1959年に各国のチャンピオンチームのトーナメントとして行なわれた。

第2回からはクラブ対抗

集ったのは14ケ国のチャンピオンチーム。ここでは、スウェーデンのRIKゲーテボルグが難敵をたおし決勝に進出してした。FA、ギョッピンゲンを破り、優勝をとげている。

△第一回戦

FA・ギョッピンゲン（西ドイツ） 24―16 オリンピア ヘンゲロ（オランダ）

グラノラース・バルセロナ（スペイン） 17―12 FC・ポルト（ポルトガル）

BTV・sｔグレン（スイス） 28―19 SC・エッシュ・アルゼット（ルクセンブルグ）

ディナモ・ブカレスト（ルーマニア） 17―5 パルチザン・ブジエロバール（ユーゴー）

アスポム・ボルドー（フランス） 11―10 O・C・I・レ・ブラッセル（ベルギー）

IF・ヘルジンガー（デンマーク） 21―14 SU・ヘルシンキ（フィンランド）

▽準々決勝

ディナモ・ブカレスト 15―14 デュクラ・プラーグ（チェコ）

FA・ギョッピンゲン 31―16 BTV・Sｔガレン

IF・ヘルジンガー 34―14 グラノラース・バルセロナ

RIK・ゲーテボルグ（スウェーデン） 26―14 アスポム・ボルドー

▽準決勝

FA・ギョッピンゲン 21―12 ディナモ・ブカレスト

RIK・ゲーテボルグ 22―12 IF・ヘルジンガー

▽決勝（1959年4月18日）

RIK・ゲーテボルグ 18～13 FA・ギョッピンゲン

以上のような結果でおわったが、スウェーデンのRIK・ゲーテボルグの快進撃が大きな台風の眼となった。FA・ギョッピンゲンもケンパ氏に率いられ、快調に進撃したが、決勝でついにRIK・ゲーテボルグの軍門に降った。

ディナモ・ブカレスト、IF・ヘルジンガーも期待されながら、今一歩の力がたらなかった。

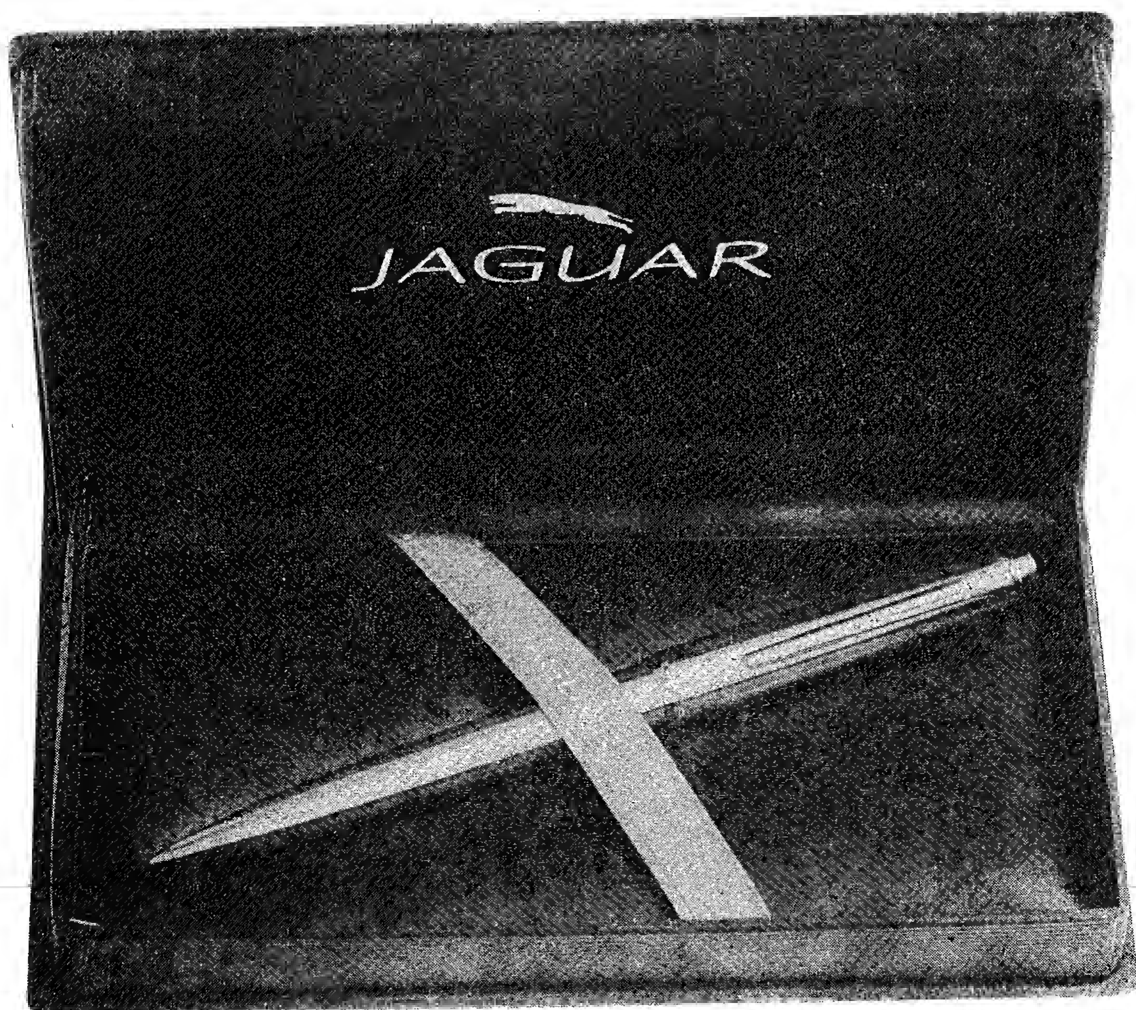
しかし、1959年はまだ西欧圏の力が強く、準々決勝に残ったのは、スウェーデン、デンマーク、西ドイツ、ルーマニアの4チームであり、ルーマニアを除く3ケ国が西欧圏のチームによって占められている。

前回に優勝したチェコは準々決勝でディナモ・ブカレストに僅差で破れ、残念ながら、二連覇はできなかった。

この準々決勝のデュクラ－ディナモ戦を除くと、準々決勝はいずれも大差になっており、各国間の差が非常に大きかったことを物語っている。

× × ×

今後数回にわたり、ヨーロッパカップの歴史を書いていくつもりです。記録はほとんど集められましたが、必ずしも完全ではありません。本稿を草するに当り、貴重な資料をフランスハンドボール協会及びIHFの歴史を記述しているギュンター・ミラーマン氏に提供していただきました。改めて感謝します。（藤本）



精かんなきみから
精かんな かれへ贈りものはジャガー

胸から出す、ノックする、書く………
三菱ボールペン《ジャガー》は、すべてに
スキがありません。
スマートなデザイン、軽快なキャップ
スライド、ムラのない書き味《ジャガー》
は、行動的な若いあなたに、ぴったりです

精悍なヤツ――
ジャガー
三菱ボールペン
¥2000・¥1000・¥800・¥500

各地の記録

北大が初優勝飾る

第8回全北海道室内選手権は2月1、2の両日登別町立幌中学体育館で行われた。

函館勢の欠場から例年に比べ参加チームは少かったが男子決勝の北大—登別ク戦は後半、登別クの猛反撃で白熱、北大が前半のリードを活かして辛くも逃げ切り初優勝を飾った。

女子は室蘭商高がOGを降して優勝した。

▽男子準決勝（＝1回戦）
登別ク 15—11 登別大谷ク
北海道大 18—5 室蘭ク
▽同決勝
北海道大 12（9—4 3—7）11 登別ク
▽女子決勝
室蘭商高 16（11—0 5—4）4 室蘭ク

田村紡、東海室内に5連勝
常盤工業3タイトル独占

第8回東海室内選手権は2月23日四日市市体育館に男女とも東海4県の予選勝者が集まり行われた

男子は、実業団—クラブの対抗になったが常盤工業（岐阜）、中京ク（愛知）が勝ち残り、常盤工業が安定した攻守を示し初優勝、中京クの3連勝を阻んだ。愛知代表以外の優勝は初めて。女子は田村紡（三重）が圧倒の試合運びで5年連続優勝。

常盤工業、田村紡ともこれで今年度東海3タイトル（東海、東海室内、東海実業団）を独占したことになる。

▽男子準決勝（＝1回戦）
常盤工業（岐阜） 20（11—2 9—4）6 清商ク（静岡）
中京ク（愛知） 13（4—7 9—5）12 本田技研（三重）
▽決勝
常盤工業 17（10—3 7—4）7 中京ク
▽女子準決勝（＝1回戦）
田村紡（三重） 16（9—2 7—2）4 大洋紡（岐阜）
ブラザー工業（愛知） 11（4—1 7—1）2 全吉原（静岡）
▽同決勝
田村紡 18（12—2 6—3）5 ブラザー工業

富士鉄Aが優勝、B2位

▼第14回愛知実業団リーグ（1月 金山体育館）
▽1部
大同製鋼 24—18 トヨタ車体
日本碍子 23（分）23 タヨシ産業
日本碍子 24—20 トヨタ車体
大同製鋼 23—21 タヨシ産業
富士製鉄B 22—21 トヨタ車体
富士製鉄A 31—12 日本碍子
富士製鉄B 29—17 タヨシ産業
富士製鉄A 38—8 タヨシ産業
富士製鉄B 31—16 大同製鋼
富士製鉄B 17—11 日本碍子
富士製鉄A 23—10 大同製鋼
富士製鉄A 20—15 富士製鉄B
トヨタ車体 22—19 タヨシ産業
大同製鋼 19—18 日本碍子
富士製鉄A 38—11 トヨタ車体

【順位】①富士製鉄A 5戦全勝＝7連勝8回目の優勝②富士製鉄B 4勝1敗③大同製鋼3勝2敗④日本碍子1勝3敗1分⑤トヨタ車体1勝4敗⑥タヨシ産業4敗1分

【2部順位】①三菱重工2勝1敗（得64、失45）＝初優勝②中部電力2勝1敗（36、37）③ブラザー工業2勝1敗（46、47）④日本碍子B3敗

▽1、2部入れ替え戦
タヨシ産業（1部） 30—11 三菱重工（2部）

山口は武田薬品光が優勝

▼第6回山口県実業団選手権（2月・徳山市体育館）
▽準々決勝（3試合）
東洋ソーダ 15—9 日本ゼオン
三井石油 25—19 小月教育空群
出光徳山 26—21 山陽パルプ
▽準決勝
武田薬品光 15—13 東洋ソーダ
出光徳山 25—20 三井石油化学
▽決勝
武田薬品光 25（14—8 11—14）24 出光徳山

男女とも興南が制覇

▼第5回沖縄高校選手権（12月・小禄高）
▽男子準々決勝
沖縄工 26—8 浦添B
沖縄 15—12 那覇
首里B 22—14 北農
興南B 24—4 小禄
▽同準決勝
興南B 13—10 沖縄工
首里B 11—8 沖縄
▽同決勝
興南B 13（3—2 7—2）4 首里B
▽女子準々決勝
小禄 24—3 那覇商
真和志 7—3 沖縄
浦添 13—11 知念
興南 16—7 那覇
▽同準決勝
小禄 14—1 真和志
興南 17—4 浦添
▽同決勝
興南 8（2—2 6—4）6 小禄

女子で室蘭商健在

▼北海道高校新人戦（2月・登別）
▽男子予選リーグA組
室蘭工 18—12 函館大谷
室蘭清水丘 9—7 函館大谷
室蘭工 9—7 室蘭清水丘
▽同B組
登別 14—7 登別大谷
室蘭東 12—5 北海道日大
登別 20—0 北海道日大
室蘭東 12—7 登別大谷
室蘭東 10—8 登別
▽同決勝
室蘭工 10（6—3 4—4）7 室蘭東
▽女子決勝リーグ
室蘭商 11—4 函館女商
室蘭商 28—6 登別
函館女商 12—2 登別

【順位】①室蘭商②函館女商③登別

大崎、埼玉教員に逆転勝ち

▼埼玉県総合選手権（2月・浦和市）
▽男子3回戦（2試合）
坂戸高OB 27—13 浦和市高
浦市高OB 16—11 川口工
▽同準決勝
埼玉教員ク 26—13 坂戸高OB
大崎電気 26—17 浦和市高OB
▽同決勝
大崎電気 26（8—10 18—7）17 埼玉教員
▽女子予選ラウンド2回戦
大崎電気B 14—3 深谷女OG
深谷女高 11—10 浦和南高
▽同3回戦（＝予選決勝）
大崎電気B 27—3 深谷女高
▽決勝戦
大崎電気B 13（6—6 7—3）9 大崎電気A

福井は教員が優勝

▼第4回福井県総合室内選手権（2月羽水高）

▽男子準々決勝
福井教員 22—16 羽水高ＯＢ
福井ク 24—16 敦賀工
羽水高 15—13 北陸電力
全若狭 — 武生商
▽同準決勝
福井教員 22—16 福井ク
全若狭 12—16 羽水高
▽同決勝
福井教員 23—11 全若狭
福井教員は2年連続優勝
▽女子1回戦（1試合）
高志高 13—2 羽水高
▽同準決勝
福井商 12—2 藤島商
全福井 11—1 高志高
▽同決勝
全福井 11—2 福井商

下関中央工ら中国大会へ

▼中国高校選手権山口県代表最終選考（第2次予選）大会（2月、下松・徳山）

▽男子1回戦
下関中央工 25—4 南陽工
下関一 10—9 岩国商
下関工 11—7 徳山
岩国工 21—8 山口
下松工 16—14 早鞆
下関西 13—9 防府商
高森 13—12 小野田工
岩国 20—10 宇部工
▽同2回戦
下関中央工 20—5 下関一
岩国工 16—12 下関工
下松工 17—5 下関西
岩国 25—10 高森
（勝者4校が中国大会へ）
▽女子1回戦（2試合）
徳山商 10—7 高森
宇部女 18—3 防府商
▽同2回戦
徳山 15—5 徳山商
下関西 15—1 岩国
高水 14—12 山口中央
宇部女 11—9 岩国商
（勝者4校が中国大会へ）

原稿募集

▽ミュンヘンへの道。八百字（厳守）。ミュンヘンオリンピックを目指す日本協会または強化対策委員会への建設的な提案。

▽技術研究の発表。技術論。1回五千字まで。ただし未発表のものに限る。薄謝贈呈。

▽各地の記録。公式試合に限る。ただし原文を短かくする場合があります。

▽球界パトロール。一千字。身近かな明かるい新しい話題。

※原稿は東京都渋谷区神南町25　日本ハンドボール協会編集部（郵便番号一五〇）宛お送り下さい。用紙は自由。〆切は毎月10日。技術論以外の原稿はお返ししません。

中京クの優勝つづく

▼第7回愛知クラブリーグ（3月名古屋金山体育館）

▽1部
上野ク 14—12 東杏会
中京ク 32—18 愛工ク
愛教ク 12（分）12 桜丘会
愛工ク 21—11 東杏会
中京ク 25—13 愛教ク
桜丘会 26—17 愛工ク
中京ク 24—9 東杏会
愛教ク 18—16 上野ク
桜丘会 19—17 東杏会
愛教ク 17—12 東杏会
桜丘会 11—7 上野ク
上野ク 21—12 愛工ク
中京ク — 上野ク
愛教ク — 愛工ク
中京ク 23—11 桜丘会

【順位】①中京ク5戦全勝＝3連勝②桜丘会、愛教ク3勝1敗1分④上野ク⑤愛工ク⑥東杏会

▽2部1・2位決定戦
名大ク 24—20 尾北ク

三菱レ、広大に快勝

▼広島県一般男子春季選手権（3月・盈進高）

▽準々決勝（3試合）
三菱レ大竹 17—13 日新製鋼
日本鋼管福山 13—12 全広島大
広島大 13—8 盈進ク
▽準決勝
三菱レ大竹 19—10 菊松会
広島大 17—11 日本鋼管福山
▽決勝
三菱レイヨン大竹 30（13—3, 17—5）8 広島大

会長に林達夫氏

愛知実業団連盟はこのほど新年度役員を次のように決め発表した空席の会長に林達夫氏（大同製鋼副社長）が就任した。

▽会長　林達夫▽副会長　田中滋章▽理事長　西村亮治（大同製鋼）△常務理事　横地宇吉、鈴木淳蔵戸谷克蔵

お・願・い

本誌の使命の一つとして正確な記録収集を心がけておりますが左記の資料をお持ちのかた、または御存知のかたは編集部に御一報下さい。

▽昭和17年秋・昭和18年春、秋の関東学生リーグ試合記録

編集後記

▽……各パート（専門委員会）は3月が一区切りですが、編集部だけは〝4月〟号が仕事納め。

2年前から、編集・発行にあたっていた我々も今号でその責をまっとうしたことになります。

▽……機関誌というものの性格の難しさに悩みながらも、どうにか紙令を重ねることができたのは、全国の読者各位の協力によるところ大なるものがあります。

技術記事を、写真を、ニュース性のあるものをといった御希望が山積しましたが御期待になかなかそえぬのを歯がゆく思っています

▽……嬉しかったのは、投稿・寄信が増えたことです。

これからもドシドシ送稿して下さい。本誌は〝皆さんの雑誌〟なのです。

2頁詳報の通り藤本強編集長の留任が決まりました。彼の才腕と新しいスタッフの努力で本誌がいっそうの発展を遂げることを信じてやみません。ごきげんよう

▽本部編集委員
藤本　強
古賀　健一郎
杉山　茂

▽ブロック選出編集委員
小松　進（関東）
氏原　享（東海）
川崎　秀雄（四国）

日本ハンドボール協会編
ハンドボール　第六十三号
昭和四十年六月　第三種郵便物認可
昭和四十四年三月二十五日印刷　昭和四十四年四月一日発行
発行所　日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南町二五　電話大代表(467)三一一一　振替東京五八三四八番
編集兼発行人　保坂周助
定価百五十円（年間購読11回・千二百円）